劇団皇帝ケチャップ第８回本公演

私の娘でいて欲しい

作　吉岡克眞

■シーン０　《回想・皐月１１歳・実家・いつか》

定刻開演。音楽F.O.。完全暗転の中。録音した陽子、皐月の声が流れる。

陽子　ねえ、皐月。一緒にいられなくなったとしてもずっと私のことをお母さんって呼んでくれる。

皐月　もちろんだよ。

陽子　よかった。あなたのお母さんは私だけなんだからね。約束よ。

皐月　約束。

■シーン１　《現在・皐月１９歳・誕生日前日・夏・夕方頃・自室》

明転。机上には卓上カレンダーと携帯電話。電話のバイブ音が鳴り響く。暫くして家具を蹴飛ばす音。漏れ出た悲鳴。皐月、痛そうにしながら入ってくる。

皐月　痛いのは私の足じゃない私の足じゃない私の電話うるさい！（携帯電話に向かって）ちょっと待って。待ってくれてもいいじゃない。そんなにブルブルしたいのかしたいのか！？

それでも鳴り続ける電話。

皐月　したいのかぁ。そっちがその気ならこっちだって、

振動する電話が止まる。

皐月　わかればよろしい。（痛みぶりかえして）痛ぅ。

机に手を置いた拍子に机上のカレンダーに手が触れる。皐月、カレンダーを見つめる。

皐月　誕生日か。おめでとう私。…って何がおめでとうか。何もめでたくないわ。明日だし、フライングだし。

再び震える電話。

皐月　（諦めて電話に出る）はい。…どうしたの突然？　いやいやいやまくしたてられて

も聞き取れませんって。…え、（と言いながら玄関の方を見る）えーー。またまた、なに今日私の誕生日だった？　サプライズ的な。だってこれさ、口車に乗せられて見に行ってさ、嘘でしたぁとか言ったら末代まで祟るよ。祟るよ。

鉄のドアを叩く小さな音が玄関からする。皐月、まさかの思いでじっと玄関を見る。再び「こんこん」とドアが叩かれる。

皐月　新聞なら間に合ってます。ＮＨＫの集金とかでしたら私テレビ見ませんから。テレビないですから、携帯もガラケーですから（手元にはスマホ）。

ドアの音がコンコンからゴンゴンと強さが変わる。

皐月　ほんと近所迷惑なんでやめて下さい。警察呼びますよ。

ぴたっと音が止み、ほっとしていると。

弥生　いいからここを開けなさい！　１０秒以内に開けなかったらドアぶち破るわよ！

照明変化。

皐月Ｍ　この声、姉の弥生です。私はやよねえとか、やよちゃんとか呼ばされてますけど、そんなに可愛いものじゃないです。ドアをぶち破ると言ったらぶち破るんです。木だろうと鉄だろうと見境なしです。結果破れなかったとしても悔し紛れに内側に開く新聞受けに接着剤を流し込むような、そういう人なんです。

皐月、恐怖にぶるっと震えて。照明変化。

皐月　待って！　今、開けるからぁ。

皐月、つま先の痛みも忘れて慌てて玄関に向かいはけ。鍵が開き、ドアが開く音。同時に外の蝉の声が室内に入り込む。

皐月（声）　　どうしたのよ二人とも。

真奈美、弥生（声）　　せーの（、サプラーイズ。）

間。

皐月　せーの、なんだぁぁぁぁ！

照明変化(ブル転)。風鈴の音がぴたりと止まって。録音した声が流れる。

皆　皐月ちゃん、１１歳のお誕生日おめでとう。

※人によっては「ちゃん」をつけない。

皐月　(明るく元気な声で)ありがとう。

皐月、衣装早替え。皐月、由紀子、佑花以外は板付き。

■シーン２　《過去・皐月１１歳・誕生日当日・夏・昼・浮島家１階》

沙弥、悟と腕相撲をして勝つ。得体の知れない勝利の雄叫びを上げる。腕を痛がる悟。弥生と陽子、智人、桜(手札がいっぱい)と慶はＵＮＯに興じている。皐月のカードがテーブルに伏せられている。

悟　沙弥は手加減って言葉を知らないよね。辞書に書いておいたらどうかな、「腕相撲、男相手にやるならば、一度ぐらいは勝たせてみよう」とか。

沙弥　実力で勝ちなさいよ。私はヤラセとか情けをかけるとか大嫌いなの。

桜　なんで短歌なの？

慶　それはいいんじゃない。

智人　痴話喧嘩も大概にしろよ。

陽子　私の話、途中なんだけど。

智人　どうせオチとかないんだろ？

陽子　それは聞き終わってから判断してもらいたいわね。

慶　オチはないと思います。

桜　オチなし。

真奈美　ふたりとも。

智人　まあ、聞くだけ聞いてみるか。

桜　社長は優しすぎるところがいまいちですよね。

弥生　わかる。優しい人っていい人に聞こえるけれど、自分を持たない弱い人間ってこと多いよね。優柔不断にも優しいって漢字使われてるし。

弥生、と言いながら皐月の伏せたカードを持ち上げて見ようとしている。他の者たちもさり気なく見ようとしている。

陽子　弥生、ここは一気に。
慶　待って下さい。足音が。

間。

桜　しないしない。まだ戻ってこないよ。
沙弥　いいの、あれ？
真奈美　え？　ちょっと駄目です。何してるんですか？

真奈美、カードを押さえる。弥生、笑いながら持ち上げようとしている。

弥生　は、は、は。真奈美さん、この世には必要悪ってのがございましょう。今まさに私は心を鬼にしてかわいい妹に世間の荒波、厳しさを教えようとしているんです。
真奈美　厳しさって。これはただのズルです。
陽子　違う違う。これは教育。
真奈美　教育って、この家の教育はどうなってるんですか？
智人　育った環境って怖いよねぇ。
桜　他人事！
真奈美　社長！
慶　ドロフォー。
真奈美　そこ進めない。何やってるんですか！？
桜　ＵＮＯ
真奈美　そうじゃなくて。

真奈美の手がカードから離れる。

陽子　ドロフォー。
智人　更にドロフォー。

弥生、嘘でしょ、信じられないという顔をしておきながら。

弥生　ドロフォー。
悟　あるんだね、こういうこと。
沙弥　次誰？
弥生　皐月。

ゲーム参加者　ご愁傷様です。
真奈美　本日の主役に優しさはないんですか？
弥生　ゲームってのはね、勝つか負けるかなんよ。ここで甘やかしたら将来痛い目を見るのはあの子なわけ。だよね。
陽子　そうそうそう。だから教育なのよ。
真奈美　何だか言いくるめられそうで怖い。

皐月、陽気にコップを持って戻ってくる。

皐月　お待たせ。誰の番？

弥生、静かに１６枚取って皐月に渡す。

皐月　え、なに？
弥生　まあまあまあ取っときなさい。じゃあ、赤ね。
皐月　えーー、いらないよ。ゲーム進めないでよ、え、なんで。
弥生　大人になったら、わかるわよ。
智人　じゃあ、その１６枚、お父さんがもらうから。
弥生　それはずるって言うんだよ！
真奈美　こっそり人の手札を。
弥生　ちょいちょいちょい！
陽子　それでね、私聞いたのよ。
智人　え、このタイミングで話し始める？
陽子　だって、あなたたち全然私の話から遠ざかっていくじゃないの。なにがドロフォーよ。ちゃんちゃらおかしいわよ。

智人、なだめつつどうぞと手で促す。ゲームは淡々と進んでいく。

陽子　だから。この白い花はなんですかって。そしたら花屋じゃなくて私の隣に立っていた男性が困った顔してこう言うのよ。『それは薔薇ですよ』って。私にだってわかるわ。バラかバラじゃないかぐらいね。じゃあ、(庭を指さして)あれはなに？　ヒマワリでしょう。わかるのよ、それぐらい。それを横から。
弥生　バラですよ？
陽子　そ。そんな感じで恩着せがましく言ったのその男は。どう？　オチはあったでしょ
智人　桜さん。はい、スキップ。
　　こしゃくな。

弥生　じゃ、スキップ。
皐月　こしゃくにゃぁ。
陽子　駄目よ、気を抜いていたら。いつ話を振られるかわからないでしょ？
桜　気を抜いていたわけじゃないんですが。
慶　リバース。
陽子　気を抜いたような顔してるわよ。四六時中。
桜　私、なんかディスられてる？　スキップ。
皐月　桜ちゃん！
桜　ごめんごめん。なんとなく出しちゃった。それより、
慶　ノーコメント。
悟　大丈夫ですよ。そこまで間抜けな顔じゃないです。
沙弥　あれぇ、悟って桜さんに気があるんだぁ？
悟　え、なにそれ。やめてよぉ。桜さんの何を以てして俺の気持ちを掴めるのよ？
桜　ん、ん、ん？　待てお前。え、喧嘩売ってる？
悟　いや、そういうんじゃ。ただ、俺の気持ちは掴めないし、よーく考えても桜さん、あれじゃないですか。だからあれだなぁと。
桜　あれあれうるさいやつだな。オブラートに包んだように見せかけて青酸カリですよこれって言われているようなものじゃない？
悟　座布団一枚。
弥生　まあまあまあ。つまりはこういうことでしょ。

一同、弥生の言葉を待つ。

桜　なにぃぃ？　ないの、その先は。
弥生　いや、これ言ったら桜さんに止めを刺すのは私かぁって思ったら。
慶　人はそれを憐れみと呼ぶんだぜ。
桜　ねえ、そんなに私魅力ないですか？
智人　えー、俺に聞かれても。悟くん、君の蒔いた種なんだからなんとかしなさいよ。
悟　と言われても。あ、人によっては魅力を感じてくれるんじゃないかと。
桜　私、世界の果てまで行ってくる。ドロツー。
皐月　桜ちゃん！！！
桜　恨みはないのよ恨みは！
慶　仕事どうするの？　お金もないでしょ。私が貸した5万円返しなさいよ。何に使ったのよ。
桜　家賃。
智人　給料はどこに消えてるんだ？

桜　服とか、色々と。
慶　ヤフオク、いやメルカリ？
桜　勘弁してよ。
沙弥　悟くん、責任とって桜さんと付き合ったら？
悟　何言ってんの。俺、沙弥一筋だし。わかってるでしょ、俺の気持ち。
沙弥　真顔で恥ずかしいこと言うな。そして顔を寄せるな兄さんの前で。(兄を見て)怒りに打ち震えて拳をさっきからわなつかせてるじゃない。
智人　どうかもうもらってやってくれよいい加減。
沙弥　私にだって選ぶ権利がある。そして今の発言は女性蔑視に聞こえる。そうは思いませんか皆さん。

挙手する女性一同。挙手の仕方に個性、自己主張の強弱が見られる。

智人　(その様子を見て)すみませんでしたぁ！　ほら悟くんも。
悟　え、なんで？
智人　ほら！
悟　(納得いかない顔で)すみませんでした。
沙弥　よろしい。
悟　あ、でも将来的にですがそれも考えていますんで俺。
智人　ん？　なにを？
悟　だから沙弥さんのこと、ちゃんと、俺するんで。
智人　ちゃんと？(と言いながらも気づいて)…冗談じゃなく？
陽子　その二人、真剣な交際中よ。
沙弥　違う！　びっくりするようなこと言わないでよ。まだ悟くんの一方通行的なやつだから。
陽子　まだ、ね。
沙弥　もう。
智人　(沙弥と悟を見つめ)またまた。あ、今日俺の誕生日だっけ？　サプライズ的な？

誰も智人と目を合わせようとしない。

智人　悟くん。君もう帰れ。君じゃない。もうお前だ、お前って呼ぶ。つーか、なんでいるの。誰の許可をもらって皐月の誕生日会に参加してんだよお前。
悟　えー、それはないですよ。ねぇ。

悟、助けてという顔で沙弥を見るが笑っているだけ。

弥生　パパ、水飲む？
智人　ああ、そうだなぁ。ちょっと色んな意味で喉が渇いた。酔いが回ったかな。
弥生　そうみたいね。皐月。お水。
皐月　ズルとかしないでよ。
弥生　私達がいつズルした？　しないしない。っていうかさ、もう圧倒的に皐月の負けじゃない？
皐月　そんなことないもん！　私が勝つまでやるもん！
弥生　はいはい。お水お水。
皐月　絶対かーーーーーつ（言いながら去る）。

皐月はけ。皆、カードを置いて休憩モードに入る。

悟　いい子だよねぇ、皐月ちゃん。

静まり返る場。弥生、汚いものでも見るような目で悟を見て引いている。

沙弥　それアウトね。
陽子　アウトだわ。
桜　アウトですね。
慶　アウトでしょ。
弥生　死刑。
悟　なにがぁ？
沙弥　おじさんがお洋服買ってあげるよ、とかやめてよね。ああ、見える。テレビのニュースで容疑者逮捕とか。刑事に挟まれて車に乗せられている姿が。
悟　ちょふざけんな。いくら俺が素敵紳士だからって笑顔で許せることと許せないことがあるぞ。
弥生　悟くんはロリコン、と。気をつけないと。
悟　（ちょっといじられることにいらっとして）勘弁してよほんとさ。１４歳に興味はない。（勿論下の年齢にはという意味だったが）
弥生　え、こわ。え、まじ？
悟　そうじゃないって！
真奈美　ちょっと。皆さん、仲良くやりましょうよ。
陽子　やってるわよ、仲良く。
真奈美　でも。
慶　（真奈美に聞こえないように）そう言えばさ、

桜　なになに。
慶　いなかった。学校にああいう優等生ちゃん。みんな、先生の話ちゃんと聞こうよとか言っちゃう空気読めない正義感キャラ。

真奈美、慶たちを見遣る。

桜　いたいた。
真奈美　なにそれ。
慶　え？
真奈美　私が空気読めないってどういうことって聞いてる？
慶　あれぇ聞こえちゃった？　悪気があって言ったわけじゃなくてね。ごめんて。
桜　真奈美さん怒ってます？
真奈美　怒ってません(と言いながら怒りが伝わってくる)。怒ってません！

皐月、グラスを持って入り。状況の変化に気づかず、智人にグラスを差し出す。

智人　ありがとう。
慶　だって別に私達誰も本気で喧嘩してたり罵っていたりしてないでしょ？
悟　ですねですね。
沙弥　悟は調子いいなぁ。今度は慶さんに取り入る感じ？
悟　そうじゃないけどさぁ。嫌じゃないこういうムード。
真奈美　空気読めないなんて言われたの、生まれて初めてです。
悟　真奈美さんも大人なんだから怒らなくてもいいじゃないですか？
慶　初めての経験、それはよかった。
悟　ちょっと慶さん。鎮火しようとしてるんですからやめてくださいよ。
皐月　なにがよかったの？
沙弥　大人はね、どんどん初めてのことが減っていくのよ。だから日常にきらめきもときめきもないの。
悟　俺があげるよ、ときめき！

悟の腹に見事なグーパンが決まる。

弥生　子供にはわからないわよ、どうせ。
皐月　子供扱いやめてよ。もう１１歳だもん。１０歳はまだ子供だけどもうすぐ中学だもん。
弥生　はっは。まだランドセル背負った子供でしょうが。さぁ、子供だって認めなさい。

皐月　やだぁ。
弥生　やだやだ言ってれば人生まかり通るなんて思わないことね。
智人　いい加減にしろよ、弥生。
弥生　そうやって、パパはいつも皐月の肩持つよね。
智人　お姉ちゃんだろ。まあ、なんだ。俺だってお兄ちゃんなんだからって言われ続けてきたんだから。
弥生　だからなに？
智人　(助けを求めるように)陽子も黙ってないでさ。
陽子　別にあなたが言ったんだからいいじゃないもう。二人して注意しても意味がない。
真奈美　あの。皆さん私のこと空気読めない女だなぁって思ってたんですか？　空気の読解力もないのに働いてんじゃないよって思われてたんですか？　あんまりです。
皐月　私、まーちゃんのこと好きだよ。
真奈美　皐月ちゃん。
皐月　うんうん。空気なんて読めなくたって大丈夫だよ。

間。弥生、笑いをこらえている。

真奈美　そっかぁ。そっかそっかぁ。

真奈美はける。追っていく皐月。

皐月　違う、ほら、ジャイアンだって歌が下手なのにリサイタル開くんだよ。えーと、でも映画版のジャイアンはね、
弥生　やれやれ。誕生日の主役がいなくなりましたので、どうぞご歓談を。

弥生、手をひらひらさせて二人を追ってはけ。智人、陽子を見つめている。

陽子　(ので)水ならあげたわよ。
智人　え？
陽子　あなたの大切なヒマワリでしょ。そんなに気になるならあなたが水を上げたらいいのよ。
智人　いや、ヒマワリのことじゃなくてさ。

間。

陽子　なにがどうしてこうなるのかしら。うまくいかないわね。

智人　だから愛しく思えるんじゃないかな。
陽子　何が？
智人　決まってるだろう。人生さ。
陽子　(笑って)くっさ。…そうね、台無しってほどではないかまだ。
智人　そうそう。物は考えようってこと。きっといずれはいい思い出になるさ。
陽子　だといいけど。

陽子、苦笑する。玄関の扉(引き戸)が開き、閉まる音がする。

佑花(声)　おじゃましまーす。
陽子　ようやく戻ってきた。って、主役が不在だわ。
桜　呼んできましょうか？
陽子　いい、いい。どうせすぐ戻るでしょ。

由紀子入り。

由紀子　すみません。遅くなっちゃいました。
桜　おっそ。君は亀なのか？
由紀子　違います。人です。甲羅背負ってないでしょ。
慶　わかって言ってるんだよ。
由紀子　なんですかそれは。亀じゃないってわかっているのに私に亀だって言ったんですか。どういう話ですかこれは。
慶　もうひとりめんどいのがいたわ。
由紀子　私は亀でもなければ雌鳥(めんどり)でもありません。
慶　わかってんだよ！
桜　で、ケーキはちゃんと受け取れたんだろうねぇ。
由紀子　あ、今佑花さんが冷蔵庫に。

佑花入り。

悟　姉さん。ケーキ。
佑花　姉の顔を見てケーキという弟よ、寂しすぎるじゃないか。

スキンシップを取ろうとする佑花に対して弱めの拒絶を示す悟。

沙弥　お気持ちわかります。

佑花　でしょ。私の気持ちをわかってくれるのは沙弥ちゃんぐらいよ。いーだ。
悟　なんだよ。もう少しは姉らしく振る舞えよ。どっちが年上かわからない時がある。
佑花　誰が年寄りだ。
悟　言ってねーよ。
沙弥　悟くんってお姉さんの前では強気だよね。
悟　な、な、(何言ってんだよ)
沙弥　いいからいいから。
陽子　で、ケーキは。
佑花　陽子まで。ちゃんと今冷蔵庫に入れてきました。すぐ食べないでしょ。
陽子　そうね。
佑花　そうでしょうが。で、本日の主役ちゃんは？
智人　ちょっと色々あって。
佑花　色々？
陽子　色々は色々よ。
由紀子　説明希望しまーす！
佑花　まるで私達がいなかった間に「とても素敵なことが起こりました、ああいうのが奇跡って言うのかしらね」みたいな空気が漂っているじゃない。
陽子　もしそう見えるのだとしたら、あなた目が余程悪いのね。
佑花　あらメガネどこやったかしら、めがねめがね。(右目隠して)左2．0、(左目隠して)右2．2。両目を隠したら前が見えません。ってなにやらせるのよ。
陽子　誰もリクエストしてない。

皐月、弥生、真奈美の笑い声が聞こえる。

佑花　あー、きっとなんかいーことあったんだぁ。私達仲間はずれなんだ。
由紀子　仕方ないですよ。ケーキ取りに行ってたんですから。
陽子　そんなに不貞腐れなくてもいいじゃない、いい大人が。
由紀子　いい女だってイジメも度が過ぎればなんとやらです。
沙弥　自分でいい女って言ったよ、この人。
悟　聞き流してあげなよ。
沙弥　だって聞こえちゃったもの、そして私口に出しちゃったもの。
由紀子　あ、大丈夫です。今からでもスルーして頂いて。
沙弥　ハートが強いね、ゆきちゃんって。
由紀子　よく言われます。
佑花　はぁ、喉乾いちゃった。お茶もらえる？
由紀子　あ、私持ってきますね。

佑花　ありがと。あとで1円玉あげる。
由紀子　いらないですよ。

由紀子、ふと立ち止まる。

由紀子　ちなみに何枚ですか？

由紀子、はける。

佑花　怖い、あの子、怖い！　……ねえ陽子さ、
陽子　なに？
佑花　考えてくれた？
陽子　なにが？
佑花　あのこと。
陽子　…はてさて。

回想。照明変化。衣装チェンジなし。

佑花　あのさ。東京行かない？
陽子　旅行？　いいねぇ。
佑花　違う。…東京で起業しない？　私と。
陽子　何言い始めてんだか。
佑花　別に突然の思いつきとかじゃなくてね、ずっと準備してきたのよ。あとは私が一緒に仕事をしたいと思えるようなパートナーに参加してもらえればと思ってね。
陽子　で私？
佑花　陽子はさ、ずっとってほど長くはないけど、こっちにいる人間では一番信頼してるし、友達だと思ってる。
陽子　友達づきあいで起業とかはあまりおすすめしないわね。遊びじゃないんだから。
佑花　わかってる。あなたには私と共同経営者になってもらいたいの。そして会社が安定するまでは営業にも力を入れてもらいたい。
陽子　私が営業？　向いてない向いてない。
佑花　そんなことない。あなたには人をたぶらかす才能がある。
陽子　たぶらかすって。
佑花　智人さんの右腕としてもちゃんと会社を支えてきたじゃない。そして私知ってるんだから。今のお得意さんって陽子が開拓したんでしょ。智人さん言ってたもの。
陽子　あの人ったら。別に私が役立ったとか思ってないわよ。社員じゃないし。

佑花　ねえ、東京行かない。ここで終わっていいの？　貴方の人生。
陽子　その覚悟で結婚したし、ここにいるんだけど。あなただってどうするのよ、旦那さん。
佑花　私のことはいいじゃない。あなたには、ここで終わってほしくないから誘ってる。
陽子　誘われてもねぇ。
佑花　ねぇ、もう一度ちゃんと考えて。ここで終わる。それとももっと羽を広げてあなたの才能、可能性を活かせる所でリスタートしてみない？
陽子　だって私年齢も年齢だし。
佑花　そんなものは関係ない。年齢なんて犬にでも食わせておきなさい。キレイゴトを言うつもりはないけど、年齢を重ねた分、私達には経験値があるのよ。それを役立てようとは思えないかしら。
陽子　役立つのかしら、私の経験なんて。
佑花　役立つわ。私には、貴方が必要なの。うん、こうやって話していてどんどんわかってきた。あなたがいないといけないんだって。

更に回想へ。照明変化。

智人　このワイシャツのシミってさ取れないんだっけ？
陽子　落ちないみたい。
智人　もったいないな。捨てるか。いや、もったいないなぁ。ほんとにこれ落ちない？

弥生入り。

陽子　あ、おはよう。
弥生　今日部活で遅くなるから。あ、この前のお弁当、あれなに、果物にドレッシングかかってたんだけど。私言ったよね。デザートとそれ以外は箱を分けてって。
陽子　ああ、ごめん。今度からそうする。
弥生　今度から？　もしかして今日は？
陽子　今日だけ我慢して。
弥生　最悪。ほんとなんなわけ。
陽子　そんなことで怒ってもしょうがないでしょ。思春期特有の反抗期とかで。皐月は？
智人　このシミさ。
弥生　まだ寝てるんじゃない？
陽子　起こしてくれてもバチは当たらないわよ。
智人　このシミなんだけどさ。
弥生　バチは当たらなくてもメリットないじゃない。

陽子　妹を起こすのにメリット・デメリット考えない。そしてあなたもシミシミうるさい。

皐月入り。

陽子　おはよう。

皐月　(眠そうに)ごはんまだ？

弥生、皐月はけ。照明変化。回想終わり。

佑花　で、どうなの？　答え聞かせてくれる？

陽子　ええそうね。

佑花　ＯＫ？　ＮＧ？　どっち？

陽子　受けるわ。

佑花　ほんとにいいの？

陽子　貴方が言い始めたことじゃない。あの人(智人のこと)にはもう伝えたし。

佑花　彼女たちには？

陽子、そっと皐月たちのいる方を見遣る。

佑花　(表情を伺って)そう。いいのね。あとあと私の責任とか言われてもあれだからね。

陽子　大丈夫よ。後悔したとしてもそれは私の責任だから。

沙弥　二人して何のお話？　混ぜて混ぜて。

佑花　聞いてるし。ちょっとお仕事の話よ。真面目な。

沙弥　お仕事？　(酔いがすーっと引いて)え、この前言ってたやつ？　受けるの？

陽子　そのつもり。

沙弥　へぇ。

陽子　何よ。

沙弥　いや、すごいなぁと思ってね。大胆というか、いやほんとすっごい決断したなぁって。

佑花　なんなら貴方も来る？

沙弥　え？

佑花　なぁんてね。貴方にはここがあるものね。

沙弥　いや、行く、行きたい、行かねばとは思うけれど、やっぱこの土地しか知らないから、ちょっと、怖いよね。

佑花　わからないでもない。

沙弥　でも兄さんのもとから離れて、解放されてもみたいのよ。

陽子　若いっていいわね。
沙弥　そんなに若くないですよ。

陽子、佑花、見つめ合い。

佑花、陽子　喧嘩売ってる？
沙弥　違いますって。お二人ともまだ若いじゃないですか？
陽子　やだやだ。若い人から若いじゃないですかって言われたら終わりだわね、私たちも。
佑花　ほんとに。オーバー３０なめんなよ。
沙弥　いや、でも羨ましいな。
陽子　なにが？
沙弥　そうやって決断して、行動できるのは。
陽子　人って考えていたらずっと考えちゃうじゃない。
沙弥　え？
陽子　だから考える前にひとまず動けってあの人が。

陽子、智人を見つめる。が、智人その視線に気づかない。

沙弥　陽子さんは兄さんのこと嫌いになったわけじゃないんですか？
陽子　はは。…だから(自分の感情が)面倒なのよ。
沙弥　(聞き取れず)え？
陽子　面倒だって言ったの。
沙弥　(言葉通りに受け取ってしまい)すみません。兄が。
陽子　なんで謝っているんだか。
沙弥　いや、ほんとに。
佑花　で、その兄をここに残して私たちと来る？　仕事がある保証はないけれど。

沙弥、智人を見つめて。智人、その視線に気づいて振り向く。

智人　なんだ？
沙弥　別に。……あの。その返事、すぐじゃなくてもいいですか？　ちょっと考えたい。
佑花　いいわよ。もしあっちで使い物にならなければ放り出すから。

悟、その様子を心配そうに眺めている。由紀子、戻ってきて。

由紀子　麦茶でよかったですか？

佑花　こういう時はワインで乾杯がよかったけど、まあいいわ。
由紀子　はい？
佑花　じゃあ私達の未来に。
陽子　未来を切り開く勇気に。
沙弥　えーと、明日晴れますように。
悟　それなんか違う。
沙弥　（無視して）乾杯！
陽子、佑花　乾杯。

照明変化。上手奥のみ明転。皐月、真奈美、弥生入り。台所にいる設定。皐月の手にはバラの花が一輪。

真奈美　さてと茶番はこんなところでよかったかしら。
弥生　ね。ほんと、巻き込まれている私達はなんなのかしら。
皐月　ありがとね。
真奈美　私の怒り方不自然じゃなかった。それが心配。あ、あと、私って空気読めてるよね。
弥生　…問題ないって。あれ、なんかおかしいぞって思える人があの中にいるとは到底思えない。
真奈美　何今の微妙な間は。そして私の空気読めてない問題についてさらりとかわされた気がするのは気のせい？
弥生　ははは。（笑って済ませようとしている）
皐月　お母さん、喜んでくれるかな。
弥生　大喜びよ。で、何言うか決めた？　お誕生日を祝ってもらうだけじゃなくて、私も何かやりたいって突如言い出した皐月さん。
皐月　何も思いつかない。
真奈美　それはそれでいいんじゃないかな。気持ちさえ伝われればね。
皐月　気持ち、ちゃんとここにあるよ。
弥生　じゃあ、そろそろ。

照明変化。今台所から出てきましたという体の三人。陽子、じっと皐月たちを見ている。

皐月　（ので）どうしたのお母さん。（バラを後ろ手に隠す）
陽子　……あのね、私から一つ話があります。
弥生　なに改まっちゃって。

皐月、弥生、真奈美の三人は隠し事にハラハラしながらも楽しんでいる様子。
智人、陽子の思惑に気づいて、今このタイミングで言うのかと驚いている。

智人　陽子。
陽子　ごめんなさい。ほんと自分勝手な奥さんで。
智人　それは今更だけど、しかし。
陽子　あのね。…(重そうになる空気を変えて)皐月。

皐月、微笑む。まるで子犬が待てをしているように陽子の言葉を待つ。

陽子　(じっと皐月を見つめ)改めて11歳のお誕生日おめでとう皐月。

周囲も和やかな空気、「おめでとう」という声。それに「ありがとう」で応える皐月。陽子その様子を見つめながら、記憶に焼き付けながら。皐月はこのお母さんの言葉に続けて言おう、バラを渡そうと思って。

皐月　(一歩陽子に向かって進み)あ、お母さん。あのね。
陽子　(周りが盛り上がる中)だからお母さん。もう少ししたら此処を出て行くわね。

ブル転。静まり返る世界。そこに風鈴が響き渡る。智人と悟、沙弥を残してはける。
照明戻る。

智人　悪いねぇ。
悟　え？
智人　片付け手伝ってもらって。
悟　いや、それは別に良いんですけど。大丈夫ですか？
智人　なにが？
悟　その、皐月ちゃん。というかご家族の、なんと言うか。
沙弥　悟くんが気にすることじゃないよ。
智人　沙弥。そういう言い方ないだろう。心配してくれてるんじゃないか。
沙弥　だったら兄さんがちゃんと考えなさい。
智人　全くだ。ごめん。
沙弥　謝られている意味がわからない。
悟　沙弥。すみません。
沙弥　二人して謝ったりして。

悟　（食卓を運ぼうとして沙弥に）あ、反対側持ってもらってもいい？
沙弥　私これでもか弱い女の子なんですけど。
悟　か弱い女の子は男と腕相撲して勝ったりしないから。連勝しないから。
沙弥　それとこれは別でしょ。めんどくさいなぁ。

沙弥、悟、食卓を移動させる（皐月１９歳の部屋の配置）。

沙弥　でも本当にどうするの？
智人　どうもしないさ。
沙弥　どうもしないってどうでもいいってこと？
智人　じゃなくてさ。彼女が決めたことだから。俺はその妨げにはなりたくない。
沙弥　そういうのって優しさって言わないからね。
悟　すみません。沙弥、一度火ついたら止まらなくて。
智人　よぉく知ってるさ。君も大変だな。
悟　いえいえ。大変なところも含めて俺、好きなんで。
智人　本人聞いている中でよく言えるな。
沙弥　でしょ。私のほうが大変よ。恋人でもないのに。ちゃんと話したんだよね？
智人　沙弥が想像している以上の時間を費やしてきたよ俺たちは。
沙弥　そう。でも子どもたちが犠牲になるのっておかしいって私は思うから。
悟　同意見です。あ、すみません。
智人　いやいいんだ。だから、こんなこと言ってもあれだけれど、皐月たちのこと、フォロー頼むよ。
沙弥　…兄さんさ。
智人　なんだよ、こんな時だけ妹に頼るなって言いたいのか？　いいじゃないか、頼ったって。兄が妹に頼ってはいけないなんて法律はないだろう。
沙弥　うん。家族だからね。たださ、フォロー出来ないかもしれない。
智人　なんで？
沙弥　私もここを出ようかなって。

暗転。沙弥、悟、智人はけ。

■シーン３　《現在・皐月１９歳・誕生日前日・夏・夕方・自室》

弥生　いやー快適快適。夏はクーラーに限るね。

「快適快適」終わりで明転。皐月入り。

皐月　ちょっとぉ。
弥生　どうした？　私はもう少しこのクーラーの冷たい風を感じていたいんだけど。
皐月　どういう状況？
真奈美　どういう状況も何もないよ。準備は？
皐月　なんの？
真奈美　なんの？　準備はって聞かれてぱっと思いつかないってのは準備していないことの証拠じゃない？
弥生　明日は誰の何？
皐月　私の誕生日。
弥生　正解。
真奈美　ということで明日連れて帰ります。
皐月　そんな急に言われても。
真奈美　急じゃありません。ずっと前から聞いてたでしょ。1年前、半年前、3ヶ月前、2週間前。でもあなたいつも同じ答えで。
皐月　ちょっと先のことはわからないかなぁって。
真奈美　ええ、ええ、そうやって返され続けてましたよ。だから今日こうして迎えに来たんじゃない。
弥生　埒が明かないからねぇ。
真奈美　帰るでしょ？
皐月　うーん。どうしようかなぁ。
真奈美　帰るって言いなさい。さもないとこうだ、こうだぞ。（何をするかはペアで考えてみて下さい）
皐月　ちょ、お母さん。やめれ。ちょっと。それ、…あふ、あふ、こら。（真奈美から逃れて）…参ったなぁ。
弥生　これ以上怒らせたらここで脱ぐわよ、お母さんが。
真奈美　なんで私？
弥生　え、だってこの前言ってたじゃない。
真奈美　あれは一肌脱ぎますって言ったの。なんで娘の前で服脱ぐのよ。
弥生　見せられてもどうリアクションしてあげればいいのかわからないもんね。
皐月　私だって悪かったって思ってるんだよ。
真奈美　そう。じゃあ悪いことしたらなんて言うの？
弥生　正直にもう言えるお年頃でしょ？
皐月　ごめんなさい。
真奈美　はい、よくできました。よく出来た子には花丸シールを、
皐月　私、もう子供じゃないんで。

真奈美　あら、私にとっては子供よ。娘なんだから。
皐月　そういう意味じゃなくて。子供扱いされるような年齢でもないって話。
弥生　大人扱いされるほど成長は見られないけどね。
皐月　失礼な姉だと思いながら、やよねえだってそんなに大人大人してないじゃない。
弥生　私は子供であることを受け入れているから。実家ぐらしマジ最高。
真奈美　やよちゃんはもう少し家事とか手伝って。
弥生　矛先がこっちに。ま、気が向いたら。
真奈美　そんなことじゃ、お嫁に行ってから大変よ。
弥生　大丈夫。
真奈美　なにが？
弥生　家事をやってくれる夫見つけるから。（皐月の視線に気づいて）ほほう。その目は何？　そもそも家事以外にも結婚できない理由あるだろう的な。
皐月　何も言ってないし。
弥生　目は口ほどに物を言うでしょうが！

じゃれあう二人。しかし。

皐月、弥生　暑い！

体を離す姉妹。

弥生　温度下げて。
皐月　下げてます。めいっぱい下がってます。
弥生　限界超えろクーラー。
皐月　設定されている数字より下にも上にもできません。
弥生　弱っちいなクーラー。そんなことじゃこの日本の夏、乗り切れないぞ。ビバエスキモー、ビバアラスカ。
真奈美　体に悪いから、ほどほどにね。そんなに暑いならうちわ貸そうか？
弥生　自分で扇ぐなんて、なんか負けた気がするからいい。
皐月　で、なーんも言わずにうちを訪ねてきたの？　え、ってことは今実家にお父さん一人？
弥生　私達がこっちに来てるんだからそうなるでしょう。なぁに言ってんだか。
皐月　ちゃんと言ってきたの？
真奈美　当然。書き置きしてきたもの。
皐月　ああそう。

寝起きぽい智人入り。ぼーと歩いてくる。
皐月、「ひとまずならいいか」と安心した様子だったが。

真奈美　『大丈夫ですから捜さないで下さい』って。
弥生　そうそうそう。

真奈美、書き置きの付箋を智人に貼り付ける(マイム)。なんだなんだというリアクションの智人、そのままはける。皐月、考える。

皐月　…違う違う違う違う。
真奈美　ん？
弥生　さぁ。
真奈美　どこかおかしな点ある？
弥生　ナッシン。
皐月　だって、そんなんもらったら家出だって思うんじゃない？
真奈美　どうして？　別に私実家に帰らせてもらいますとか、ちょっと考えたいことがありますとか、あなたのことは好きではなくなりましたとか、お別れですとか書いたわけじゃないよ。
弥生　そう。ただそこには『大丈夫ですから捜さないで下さい』って書かれているだけ。
皐月　『大丈夫ですから捜さないで下さい大丈夫ですから捜さないで下さい』伝えたいメッセージ以上のことが込められているんだよ。イメージ(してみろ)！

わからないわねぇ、という様子の真奈美と弥生。

皐月　だめだぁ。

皐月、慌てて電話をかける。暫くして、由紀子入り。手には子機。

由紀子　はい、浮島です。
皐月　あ、もしかしてゆきちゃん？
由紀子　この声はもしや、…どなたでしたっけ？
皐月　皐月です。
由紀子　ウソウソ。わかってるって。お久しぶり。元気だった？
皐月　だっただった。それはどうでもよくてね、お父さんいる？
由紀子　いらっしゃいますけど。
皐月　けど？　けどってなに？　どういう感じ？

由紀子　見たまま言うと、『どうしようどうしよう』と呪文のように唱え続けて家を行ったり来たり、外へ出たり入ったり。先程は「俺は捨てられたのかぁぁ」と庭で叫んでおられました。

皐月　（頭を抱えて）じゃあ今は？

由紀子　今はねぇ。

智人ぶつぶつ言いながら入り。手には書き置きの付箋。それを追うように桜入り。

智人　どうしようどうしよう。

桜　社長。仕事してください。椅子に座って下さい。そして仕事をして下さい。

智人　だってさだってさぁ。

智人、はけていく。桜もはけ。そしてすぐに智人入り。今度は慶が入ってくる。

智人　実家に連絡したほうがいいかな。待っていたほうがいいかな。

慶　捜さないでってことは捜さないほうがいいんじゃないですかね。はい、お仕事しましょうか。

智人　俺を傷つけないための最後の優しさでしょこれ。娘連れていなくなるなんて。俺何した？　ギャンブルも、しないし、浮気も、しないし、お酒も、そんなに飲まないし。

慶　ちょっと言い淀んでいるあたりが怪しさありますけどね。

はけようとする智人。その方向から桜入り。

桜　ここは通しません。お仕事です。

慶　捜すのはいったん置いておきましょう。ね。

由紀子、一部始終を眺めていて。

由紀子　とまあ、ひとりでなんか盛り上がってます。

皐月　どういう状況？　今電話代われる？

由紀子　試してみます？

皐月　おねがい。

由紀子　社長。お電話です。

智人　真奈美？　弥生？

由紀子　違いますけど。

智人　じゃあいい。出ない。っていうか二人から電話かかってくるかもだから切って。即切って。
由紀子　え、いいんですか。いいんですね。
智人　いいよ。

由紀子、電話を切る。智人はこの間も桜と慶から逃げ回っている状況。暫く電話に耳を当てている皐月だったが。

皐月　これはぁ、…(ディスプレイを見る)切られてる。ふざ（けんな)。

皐月、かけ直す。すぐに電話に出る由紀子。

皐月　何故に切る？
由紀子　いや、社長が真奈美さんと弥生さんじゃないなら切っていいって言われたので。
皐月　だからって切ることないでしょ。こっち用事があってかけてるんだからさ。
由紀子　あ、そうだ。皐月ちゃん。明日って何時に来る予定？
皐月　もう私行く前提なんだ。
由紀子　あったりまえでしょ。ハタチおめでとう！
皐月　まだ一日あるからね。
由紀子　で、何時に来る？
皐月　じゃあ午後２時とか３時とかあるいは８時とか１０時とか。そうなったらもう行かなくてもいいかなっていう。
由紀子　わかった午後２時ね。じゃあ、そのぐらいのタイミングでケーキ取りに行ってくるから。
皐月　相変わらずだなぁ、そういうとこ。じゃあさ、私チョコレートケーキがいいかな。
由紀子　ははは。バカも休み休み言ってよね。ショートケーキで注文済なのよ。
皐月　誕生日ケーキはショートケーキっていう先入観と言うか固定観念と言うか、そういうの壊していこうよ。
由紀子　桜さんみたいなこと言わないで。
桜　私がどうしたって？
由紀子　いや、皐月ちゃんがね。
智人　皐月？　皐月から電話？
由紀子　そうです。代わります？
智人　もちろん！　(電話を受け取って)もしもし。
皐月　ご無沙汰。
智人　ご無沙汰って、少しは帰ってきなさい。そして電話もかけてきなさい。俺はとても

ホームアローンだよ。
皐月　私だって付き合いが色々とあるんだよ。
智人　友達と遊んでばかりいないで時にはお父さんとも遊びなさい。
皐月　お金くれるなら。
智人　やるやる。２０００円ぐらいやる。
皐月　中学生かよ。
智人　かよはやめなさい。かよは。プラス往復の交通費もだすぞ。宿泊費も飲食代もかからない、そんな素敵な実家生活をお父さんとエンジョイ。って、そうじゃない。今はそれどころじゃなくてだな。母さんたちが出て行った。書き置き残して。
皐月　その件で電話したんだよ。
智人　どこにいるか知ってるのか？
皐月　まさに今うちにいます。クーラーの風を浴びて気持ちよさそうに寛いでます。
弥生　お構いなく。
皐月　お構いなくじゃない！
智人　そっか。そっちにいるのか。俺はてっきりなにかがバレて捨てられたのかと。
皐月　捨てられたか。
智人　待て。
皐月　え？
智人　じゃあ、俺はなんでここにいるんだ。こうしてはおれん。
皐月　え、なに？
智人　俺もそっちに行く。
皐月　断る。
智人　なんでだ。
皐月　だって仕事あるんでしょ。
智人　仕事はひとまず置いておいてだな。
慶、桜、由紀子　社長！！！
智人　許せ、社員。俺には家族の方が大事なんだ。
皐月　明日帰るから。
智人　どこに？
皐月　だから明日うちに帰るからさ。別に今日来なくていいよ。
智人　そっか。
皐月　うん。だからお仕事がんばって。
智人　じゃあ仕方ない。仕事しながら待ってる。

桜、慶、由紀子、ほっとした表情を浮かべてはける。

皐月　うん、待ってて。じゃ。
智人　あ。
皐月　なに？
智人　陽子には連絡したのか？
皐月　まだ。だって帰る予定なかったし。あ、でもしつこく電話かかってきたわ。

陽子入り。照明変化。智人はけ。

陽子　今年でハタチかぁ。
皐月　そうだねぇ。
陽子　ハタチっていう年齢はさ、ちょっと特別感あるわよね。ハタチ。
皐月　そう？
陽子　だって考えてみなさいよハタチ。ハタチの成人式はあっても１８歳式とか１９歳式とか２１歳式とかないでしょ。特別なのよハタチは。
皐月　そうかぁ。そこはかとなくハタチを強調してくるよね、母さん。
陽子　自覚しなさいよ。
皐月　はい。
陽子　で、実家には帰るんでしょ？
皐月　どうしようかなぁって思ってる。
陽子　バカァ。こういうときは実家に帰る。で家族と過ごすでしょう。他の案はないわよ。帰りなさい。そしたら私もふらっと顔出すからさ。
皐月　うーん、まあ、ちょっとバイトとか色々やることもあるからさ。
陽子　バイトと家族どっちが大事なの？
皐月　バイト。
陽子　嘆かわしい。お金と家族の愛どっちが大事なの？
皐月　お金。

陽子、言葉が出てこない。

皐月　(ので)冗談だよ、冗談。
陽子　やるわね。冗談に聞こえなかったわ。一瞬真奈美さんの育て方を呪ったわ。自分の育て方は棚に上げてね。

佑花、沙弥入り。佑花、時計を見せて、「時間」と言っているようだ。

陽子　あ、そろそろ行かないと。

皐月　お仕事？
陽子　ええ。
皐月　おつかれさま。
陽子　そういうこと言うようになったんだ。
皐月　日々成長してるってこと。
陽子　親の知らぬ間に子は育つってことね。大学は楽しい？
皐月　やだ。お母さんって同じようなこと聞きたがるのね。
陽子　真奈美さんとはうまくやってる？
皐月　いい距離感でやってるよ。
皐月　でもまだ帰るかはわからないから。
陽子　家族だからってね、会える時に会っておかないと会えなくなってから後悔しても遅いんだからね。わかってる？
皐月　それは、母さんに教わったよ。身をもってね。
陽子　そういうことじゃなくて。まあ、悪かったわよ。あなたがそれ持ち出し続けるなら私は謝り続けるよ。
皐月　いい。ただの冗談だから。
陽子　知ってる。
皐月　私達にとってはもう。いやよそう。バカバカしいよ、いつまでも。
陽子　そうね。じゃ、決まったら連絡して。佑花や沙弥たちも連れて行くからさ。
皐月　うん。じゃ、また。

陽子エリアのみ照明。

陽子　やれやれ。世話のかかる。
佑花　どうかした？
陽子　皐月がね、実家帰らないって。
沙弥　帰らないでどこで何するの？
佑花　誕生日会やらないの？
陽子　やるよ。何言ってんのよ。ハタチよハタチ。ドンキでクラッカーも買ったし、「本日の主役」タスキも買った。三角帽子も買ったんだから。これを一緒にかぶって写真撮って、インスタに上げるんだから。「3姉妹なぁぁんちゃって(てへ)」みたいなやつ。一度やりたかったんだよねぇ。
佑花　炎上するわんなもん。なんか違った方向に張り切っているような気がしないでもないわね。
沙弥　可能な限りそんな写真はみたくない。恥ずかしい。元身内としても社員としても。お得意様が見たらどう思うかって考えて行動して下さいね。

佑花　よく言った。
陽子　違った方向でも私がこうだと言えば合ってるのよ。
佑花　その強引さは好きよ。
沙弥　それでこそですけどね。
陽子　あなたたちに好かれてもね。
佑花　あら残念。
沙弥　私達ぐらいですよ、好きだって言ってくれるの。
陽子　それはそれで寂しいわね。でも、なぁんかさっきから忘れている気がして。そわそわというかぞわぞわする。なんだろう。ねぇ。何だと思う。
佑花　私たちに聞かれてもねぇ。誕生日かぁ。私にもさ誕生日プレゼントちょうだいよ。
陽子　なんでよ。大人のあなたは自分へのご褒美とかやっていればいいでしょ。
佑花　そんなぁ。
陽子　ん？　誕生日プレゼント？…あーーー。皐月の誕生日プレゼント買ってない！

照明変化。陽子、佑花、沙弥はけ。
真奈美、窓を開ける(マイム)。風鈴の音が聞こえる。

皐月　連絡しないとなぁ。
真奈美　陽子さんに？
皐月　そ。
弥生　私さっき連絡したけど。
皐月　いつ？
弥生　さっき。『今皐月の家に来てまーす』みたいなＬＩＮＥ。
皐月　なんだって？
弥生　『でかした。縄で縛ってでも連れて行きなさい』って強いお言葉頂きました。お母さん、縄ってコンビニで売ってるかな？
真奈美　ドン・キホーテよ、こういう時は。
弥生　皐月、ここから近いドンキはどこ？
皐月　なんで私が縛られる縄を買いに行くって言ってるのに情報提供しないといけないのよ。
真奈美　そりゃそうだわ。やよちゃん。ググりなさい。そしてお行きなさい。
弥生　やべぇ、釈由美子出たよ。ちょっと見張っててね。私行ってくるから。

弥生、はけ。玄関のドアが開閉する音。

皐月　相変わらず騒がしい。

真奈美　あれでも少しはおとなしくなったのよ。
皐月　あれで！？
真奈美　成長よ。はは。でも懐かしいでしょ。
皐月　うん。そうだね。…あのさ。

皐月、言葉を選んでいるが其処には隠し事はなく。

皐月　別に実家にいたくなくて家を出たわけじゃないし、帰りたくなくて帰ってないわけじゃないから。それはわかってほしいかな。
真奈美　(愛しそうに皐月を見つめ)わかってるわよ。
皐月　ならいいんだけど。本当に帰るのが面倒だったから、なんかタイミング逃してずるずるしてるってだけだから。
真奈美　(ちょっと強い調子で)言い訳はいりません。
皐月　お母さん。
真奈美　(笑って)わかったって言ってるでしょ私。
皐月　(安心して)そっか。だよね。
真奈美　ねえ皐月。
皐月　なに？
真奈美　覚えてる、誕生日会のこと？
皐月　(笑いながら)全部は思い出せないよ。
真奈美　さっきね、ここに来るまでの電車の中とかでね、やよちゃんと話してたの。皐月ちゃんの１４歳のお誕生日会のこと。皐月ちゃんたら朝から落ち着かない感じでね、

照明、真奈美のセリフ中より変化。皐月だけを残すように絞られていく。真奈美、サイレントで話を続けている。微かに笑みを浮かべて真奈美を見つめる皐月。暗転。机上のものははける。皐月、真奈美はけ。音楽高まっていき。Ｃ．Ｏ．録音した声が流れる。

皆　皐月ちゃん、１４歳のお誕生日おめでとう。
※人によっては「ちゃん」をつけない。
皐月　あ、えーと、ありがとう。

■シーン４　《過去・皐月１４歳・誕生日当日・夏・お昼頃・オフィス》

智人、由紀子、板付き。智人の携帯が鳴る。

智人　（電話に出て）はい。…

智人、何も言わず電話を切る。

由紀子　いいんですか？

智人　間違い電話だ。

由紀子　にしてもあっさりと。

智人、携帯鳴る。

智人　（電話に出て）はい。

相手が喋ろうとした瞬間に電話を切る。

智人　（聞かれてもいないが）間違いだよ。電話番号変えようかな。

由紀子　機種変したらいいんですよ。すっごいですよ、今の携帯事情。電話なのに電話以外の大抵のことができちゃうんですから。定期にも使えるし、コンビニで支払い出来るし、ゲームも出来るし、写真も撮れる。

智人　そのぐらいの機能だったらこれにだって（手にはガラケーがあり見つめる）。でも電車に乗らないし、コンビニもないからスマホはいらないな結論。

智人の携帯がまた鳴るが、出ることなく切る。笑い合う二人。

由紀子　でもほんとに何もしないでいいんですかねぇ。それとなく働いている感じを醸し出したりしてはどうでしょうか。

智人　社長命令だ、何もするな。

由紀子　食器並べるとかであれば私達にも出来るんじゃないですか？

智人　きっと俺たちはつい手が滑って割ってしまうのがおちだろう。

由紀子　そんな漫画のようなことやりませんよ。社長と一緒にされている私って一体。

智人　なかなか言うようになったじゃないか。減給。

由紀子　すみませんでしたぁぁ！

智人　冗談だ。でも我々は割るかもしれないし割らないかもしれない。この世には絶対なんてないんだからさ。

由紀子　そうですね。

智人　自分自身は注意していて手が滑ることはないかもしれない。しかし誰かにぶつかって食器を落として割ってしまうことがあるかもしれない。結果だけ見たら食器

は割れているんだよ。
由紀子　自分の役立たなさに絶望します。
智人　大丈夫。絶望するにはまだ早い。…あと休日に悪かったね。
由紀子　え？
智人　いや、皐月の誕生日に毎年参加を半ば強制してしまって。
由紀子　どうせ家でやることもないですし。一人でいるのもいいんですが私は誰かとわいわいパーティーとかやるほうが好きなんで。あ、でも桜さんはぶーぶー言ってます。社長には内緒にしておいてって言われましたが。
智人　…えーと、あれ？
由紀子　はい？
智人　いや、それ聞いちゃってよかったのかなって。
由紀子　いいんじゃないですか。内緒とかここだけの話とかっていいながらも情報が拡散されるケースが大半じゃないですか。
智人　いやまあ。…ちゃんとケーキ受け取れたかな。
由紀子　はじめてのおつかいとかじゃないので大丈夫だと思います。大人ですし。ろうそくを貰い忘れるなんてこともないかなと。
智人　あー、君と佑花さんが行った時はそれやったよね。まあ、結果ろうそくいらなくなったけど。
由紀子　あの時はほんとすみません。まさかろうそく付けて下さいって言わないとつけてもらえないって知らなくて。
智人　そりゃそうだ。5才児なのか６０歳児なのか本数は桁違いだ。ま、６０本もろうそくなんて立てられないけどな。
由紀子　貰いそこねた１１本のろうそく。今日は１４本。あと何本のろうそくが必要なんでしょうね。この瞬間火を付けられて吹き消されるためだけのろうそくは。
智人　でもいつかはここを出て行くんだろうな。
由紀子　そりゃあ、まあ。陽子さんみたいに出て行くかもしれませんけどまだ先の話かと。だってまだ皐月ちゃんは１４歳になったばかりなんですから。
智人　とは言え、もう１４歳だ。あっという間だよ。親が子供と一緒にいられる時間なんて。
由紀子　結局３年前はケーキ食べることなくお開きになっちゃいましたもんね。陽子さん、あのタイミング選ぶとかすごいですよ。
智人　そりゃあね。
由紀子　私びっくりしちゃいました。あ、違う。びっくりしたふりをしましたね。
智人　ふり？　え、なに？
由紀子　だからふりをしたんです、あの時。
智人　なんで？

由紀子　だって知ってましたから。
智人　そうなの？
由紀子　はい。これ、佑花さんには秘密ね、って言われたんですけどね。
智人　いいや。
由紀子　はい？
智人　君は人が黙っててとか秘密ねって言ったことを全部口にしようとする。
由紀子　でもそういう限定ごとほど限定されていないってことじゃないですか。巡り巡って私の耳に入るじゃないですか。私が喋ろうが喋らなかろうが社長の耳に入ることになりますよ。
智人　でもさ。いや、よそう。そういうことじゃない。俺たちが争ったところで何かがどうなるってことじゃないからな。もう起きてしまったことだし、しかも3年前の話だ。
由紀子　だからもう時効ですよ。私が喋ることも。
智人　でも俺は聞きたくないんだよね。もし聞くとしたら本人に聞くさ。
由紀子　慶さんたち遅いですね。なんかトラブってるんですかねぇ。
智人　ケーキ受け取るだけで？
由紀子　意外とあそこのケーキ屋の主人が意思疎通できなくて。注文したはずのものがどれなのかわからないって言い始めたんです、この前、ってもう3年前ですけど。
智人　違うケーキ屋にしたほうがいいのかな。
由紀子　ケーキ屋なんてあそこぐらいじゃないですか。だからちょっと偉そうにしているんです、あそこのご主人。私嫌いですね。まあ、大きなスーパーとかコンビニとかで良ければ来年からはそこにしましょう。
智人　…ケーキ屋がいいな。うん。
由紀子　じゃあ、まあ、受け取る人が頑張るってことで、来年も。

ドアをノックする音が。

智人　はい。
由紀子　私が。

ドアを開けに行こうと立ち上がる由紀子。しかしすぐに桜、慶が入ってくる。

慶　ただいま戻りました。
桜　戻りました。いやぁ暑かった。
智人　おつかれさま。
由紀子　何か飲みますか？

慶　じゃあ、赤ワイン。
桜　私、日本酒。甘いやつ。
智人　なぜ酒を注文する。ソフトドリンクにしておきなさい。パーティー始まる前に潰れるぞ。
慶　こんな日には酒でも飲まないと。
桜　ですねぇ。こんな日には一刻も早く潰れてしまいたいです。あー、ついてない。
慶　桜。
智人　なんかあったのか？　あーついてないって？
桜　違います、今日も暑いTonightって言ったんです。熱帯夜です。
慶　（切り捨てるように割って入り）なにもありません。私に限って問題はありえません。
智人　ならいいけど。
由紀子　で、どうします。
智人　ん？
由紀子　飲み物。
智人　麦茶でいいんじゃない。やっぱ夏は麦茶だって鶴瓶も言ってるし。
由紀子　はい。

由紀子、出ていこうと踵を返したところでドアチャイムが鳴る。

智人　誰か来た。

ブル転。

■シーン5　《過去・皐月14歳・誕生日当日・夏・お昼前（シーン4と同時刻）・浮島家》

真奈美、皐月、弥生。明転後セリフと共に椅子と机を移動させ、テーブルクロスをかける。

皐月　今日はもうお水あげた？　あげてないなら私が。
真奈美　あげたあげた。朝の早い時間にもうあげました。その時間は夏休みだからってぐーすか寝ていたじゃない。ヒマワリも嘆いて俯きそうよ。
皐月　だって夏休みなんだもの。宿題なんてなかったことにして眠りを貪りたいじゃない。
真奈美　そんなに寝てたらいつの間にかベッドと同化しちゃうわよ。
皐月　そんな能力、人間にはありません。

真奈美　朝起きたら虫になってたみたいな話があるんだから、
皐月　それは創作でしょ。
真奈美　人間椅子なんてタイトルの小説があるぐらいなんだから。
皐月　小説じゃない。江戸川乱歩じゃない。
真奈美　だからあっという間に夏休みなんて終わってしまうから、一日一日大事に過ごしなさいって話よ。宿題をやれとかそういう話じゃないんだから。青春なんて気づけば終わってるんだから。
弥生　じゃあ私宿題やらない。
真奈美　やよちゃんはやりなさい。大学行くんでしょ。
弥生　行くけど、まだ私高２だし。青春エンジョイしてもいいと思って。
真奈美　１学期の成績表、あれは？
弥生　成績表は成績表じゃない。本番じゃないでしょ。
皐月　成績表なんかで私たちの評価は出来ない！
真奈美　そういう時だけ仲良くなって。
弥生　お母さんは黙ってお庭のお花に水でもやっていればいいでしょ。
真奈美　だからもうやりましたって。
皐月　お庭のお花も喜んでるね。
真奈美　とってつけたように。
弥生　ヒマワリもだいぶ成長したわねぇ。太陽に向かってぐいぐい伸びてる。
真奈美　そうね。あっという間に私伸長追い越されちゃった。
皐月　私来年の夏は２０センチ伸びるから、そうしたらヒマワリといい感じに張り合えると思うんだよ。
真奈美　２０センチ伸びるからってなに？
皐月　いや、今年あんまり伸びなかったから。きっと今年の分も来年伸びるんじゃないかなって。牛乳いっぱい飲まないと。
弥生　このまま伸長止まったりして。
皐月　やよねぇ！　でも私まだ１４だけどさ、やよねえはもう１７だから止まってるんじゃない？
弥生　……(余裕こいた笑顔がだんだんと変化して)ブーメランだったかぁぁぁぁぁ。
真奈美　皐月ちゃん。１４歳のお誕生日おめでとう。
皐月　ありがとう。でもさっきも聞いたよ。
真奈美　お誕生日を祝う言葉は一回だけってルールはないでしょ？
皐月　それはそうなんだけどね。
真奈美　皐月ちゃん。
皐月　もういいよ。ありがたみがなくなっちゃう。まるで朝礼の校長先生のお話みたいになっちゃう。

真奈美　うまいこと仰る。

その一見ほのぼのと見えるやり取りを少し離れて見ている弥生。にまにまと笑みを浮かべている。

真奈美　(ので)どうしたの？
弥生　なぁんでもない。
真奈美　変なやよちゃん。
皐月　お姉ちゃんが変なのは今始まったことじゃないからねぇ。
弥生　あはは。

すっと立ち上がる弥生。身の危険を野生の勘で感じる皐月。

弥生　私、変かなぁ？

弥生、と言いながら獲物を狙うかのように皐月を追い回す。逃げる皐月。テーブルの周りをぐるぐると。履いているスリッパを投げつける、取っ組み合う、などただ追う、逃げるだけでなく。

皐月、弥生　暑い！
真奈美　なんでもないって言ってなんでもない人なんていないのよ。
弥生　それは極端だわ。大丈夫だよって言っている人に限って大丈夫じゃないって決めつけるのと一緒よ。
真奈美　ねぇ、やよちゃんはもしかして妬いているのかな？
弥生　なんで？
真奈美　皐月ちゃんみたいにやってもらいたい？
弥生　いいわよ、私は。
皐月　この人、強がっちゃってます。そんなキャラじゃないでしょ。
弥生　わかってないねぇ私という人間を。
皐月　野蛮、いじわる、頑固、プライド高い、あとはね。
真奈美　妹思い。

間。

真奈美　あれ、違った？
弥生　全然違うし。これだから母親歴が浅い人は。

真奈美　なぁんだ。当たってると思うんだけどなぁ。
皐月　当たってないよ。当たってない当たってない。だって妹思いのお姉ちゃんなら、私が妹思いのお姉ちゃん欲しいとか思わないでしょ。
弥生　妹思いってそもそも何？
皐月　例えばね、プリンとか買ってくるとするでしょ。そうしたら何も言わなくても妹の分も買ってくるとかね、宿題で私がわからないオーラを垂れ流してたら「何がわからないの？　お姉ちゃんが教えてあげる、というかお姉ちゃんが代わりに宿題やってあげるよ」ていうのが妹思いの姉でしょ。

間。

真奈美　甘い。甘すぎる。
弥生　なによその妹を甘やかす不届きな姉は。いないいない。この世にそんな姉はいない。
皐月　いるし。同級生の村上さんのお姉ちゃんがそうだし。私見たし。
弥生　で、甘やかされて育った妹とやらはどうなのよ。どういう妹になったのよ。
皐月　根性がない、人にすぐ頼る。
弥生、真奈美　ほらぁぁ。
皐月　それは村上さん個人の問題でしょ。
弥生　私は泣く泣く崖から突き落とし続けるの。そういう姉であるの。それが妹から恨まれることになったとしても。しくしくしく。
皐月　そうすることで姉であることに優越感を感じるからでしょ。
弥生　あなたのためでしょう。しくしく。
皐月　んなこと頼んでないし。え、私がいつ頼んだ？　何時何分地球が何回回った時？
真奈美　小学生の喧嘩じゃないんだから。（パンと手を打って）はいはい。喧嘩おしまい。でも喧嘩するほど仲がいいって言うけど、
皐月、弥生　どこが！
真奈美　私まだ言い切ってないのに。
皐月　大体もうわかるもの。
弥生　同じく。
真奈美　いつまでも親の言葉を聞いてくれると思っていたら、いつの間にか成長しているってことなのかしら。やだもう。
皐月　どうしたの突然？
真奈美　ううん。今ね、二人がウエディングドレスを着ている姿が思い浮かんでね。涙腺が。
皐月　早いって、お…（お母さんと言おうとするが言葉が出ないので間が生まれる）。
真奈美　ん？

皐月　なんでもない。私なんて結婚できる年齢にすらなってない。永遠の１４歳。いつまでも実家にいるからね、おいしいごはん作ってね、お（再び間が生まれる）。
弥生　（妹が何をしようとしているかなんとなく気付きつつ）結婚なんて全然イメージできないわぁ。っていうかさ、私たちよりもお母さんが着ないと。
真奈美　え？
皐月　ウエディングドレスでしょ。
真奈美　ああ。
皐月　ほんとに着ないの？　結婚式あげなくていいの？
真奈美　いいのよ。
弥生　もしも私たちに気兼ねしているとかだったらやめてよね。
皐月　やよねえの言う通りだと思う。別に私はさ、反対とかしないし、ウエディングドレス見たいし、バージンロード歩いてくるのを見たいし。新郎新婦に米投げつけたいし。
弥生　お母さんさ、私たちはお母さんの子供になったんだよ。お父さんが再婚した時から。だから私達に遠慮とか我慢とかしてもらうと私達もやるせなくなるからさ。
真奈美　やよちゃん。
弥生　皐月もそうでしょ。
皐月　勿論だよ。
弥生　だったら何変な顔して笑ってるのよ。
皐月　え？　私笑ってなんて。ちょ、その前に、変なって何？　変顔なんてしてないんですけど。
弥生　変ってのはさ別に変顔してる人に向かって「あなた変な顔ですね」とか言わないでしょ。そういう意味で指摘したくなるような顔だったってこと。
皐月　全然わかんないんですけど、え、どういう顔だったかやって見せてほしいな。
弥生　めんどくさ。
皐月　さあさあやってごらんよ。私がどんな顔して笑ったか。それ出来なかったら罰ゲームだからね。
弥生　なんで！
真奈美　ちょっと。やめなさい。
弥生　ごめん。お母さん。止めないで。
真奈美　止めるよ。今日が何の日かわかってるでしょ。皐月ちゃんの誕生日だよ。なんで二人はそんなに喧嘩したがるの。昨日も一昨日も喧嘩して。なんで喧嘩したか思い出せる？　大した理由もなく（言い争って）。
弥生　（皐月に）いつになったら真奈美さんのことお母さんって呼ぶの？
皐月　話すり替えないでよ。
弥生　すり替えてなんかないよ。全部同じことなんだから。皐月が変な顔して笑うのも、

お母さんって呼べないのも。

間。

弥生　私は呼んでるよ。

真奈美　…呼ばれてるよ。

間。

皐月　そうだね。

弥生　もうっ。お母さんって。一回呼んでしまえば意外としっくりくるんだよ。皐月の中では一大事みたいな位置づけになっているのかもしれないけどさ。だからかな、まーちゃんのことずっと呼んでないよね。お母さんとも、以前は呼んでいたのに「まーちゃん」って言い方でも今は呼んでない。どうして？　このまま皐月の中ではまーちゃんを名無しの権兵衛にしていくつもりなの。それ可哀想だよね。権兵衛だよ。権兵衛じゃ男だよ。

真奈美　それはいいよ、権兵衛は。

皐月　権兵衛にするつもり私にだってない。たださ、

弥生　ただ？

真奈美　権兵衛。

皐月　私だって考えてるんだよ。何も考えもなくこんなことしてないし。順番というのがあるの。

弥生　へぇ、順番。

皐月　そう順番だよ。

弥生　(間)順番なんざ知るかぁぁぁぁ！

弥生、皐月の頬を手でつまんで「お」の形にする。

皐月　お、お、お、おお。

弥生　言え、言ってみろ、言ってみよう。

真奈美　ちょちょ、やよちゃん。

皐月　お、おおお、おおおおお、

照明変化。皐月、弥生の手から逃れて。皐月以外はストップモーション。

皐月M　中学２年、帰宅部の腕力と高２バスケ部の腕力。この差は大きかった。超えられな

い壁だった。だから私は腕立てをした、スクワットをした、腹筋もした。3日で終わった。そうだ、きっと高校に上がったら対抗出来るぐらいの腕力身につくよ、そう思って現実逃避した当時の私を諭してやりたい。「人生、そう甘くはない」と。物事には順番がある。1の次は2が来るわけで、3がいきなりやってくるなんてことはないんだから。

回想。服装チェンジなし。慶入り。

皐月　あ、慶さん。
慶　はいなんでしょ？
皐月　あの私欲しいものがあって。
慶　？　ま、待って下さい。
皐月　え？
慶　だって、もう買ってしまいましたもの。皐月ちゃんの誕生日プレゼント。
皐月　あ違うんです。
慶　今から取り替えてとかできませんもの。その時間ないですもの。

慶、去っていく。

皐月　違うの！　違うのにぃ。

桜入り。

皐月　桜さん。
桜　はい？
皐月　私欲しいものがあって。
桜　なるほどなるほど。干し芋ですか。ちょっと待っててください。コンビニまでーっと行ってきますから。社長には内緒ですよ。

桜はけ。皐月、言葉もなく見送る。由紀子入り。

皐月　ゆきちゃん。
由紀子　私？
皐月　あのね、私欲しい、…
由紀子　欲しい？
皐月　単刀直入に言います。明日の私の誕生日なんだけど。

由紀子　おめでとう。
皐月　ありがとうってまだ１３歳だから。
由紀子　なぁに言ってるんですか！？　四捨五入したらどちらも同じですよ。

皐月、少しだけ考えてみる。

皐月　（スルーすることに決める）よし。誕生日会には来てくれるんだよね。
由紀子　休日出勤になるけど、致し方ないよねぇ。
皐月　え？
由紀子　ジョーク。私も家でごろごろしてるぐらいしかやることなかったし、いい気晴らしになるわ。
皐月　そう、よかった。でね、その来る時にでいいから赤いバラを一輪買ってきてもらいたいの。もちろんあとでお金払うから。
由紀子　バラ？
皐月　必要なの明日。
由紀子　ＯＫ。
皐月　ありがとう。やっぱ頼めるのはゆきちゃんだけだよ。
由紀子　と言いながら慶さんや桜さんに声かけてたよね。
皐月　やだ、見てたの？
由紀子　ずーーーっと。

由紀子はけ。回想終わり。皐月、回想前の状態を引継いで、頬をさすっている。

皐月　私のことはほっといてくれる。
弥生　何その言い方。私は姉としてちゃんと皐月やお母さんのこと考えて。
皐月　こんな時だけお姉ちゃんぶらないでほしいんだけど。
弥生　それ言う？
真奈美　やめなさいって。皐月ちゃんも。無理強いすることじゃないのよそんなこと。
弥生　そんなこと？　二人しておかしいよ。お母さんって呼ばれたいならそう言えばいいじゃない。呼びたいって思ってるなら呼べばいいじゃない。
真奈美　やよちゃん。
弥生　じゃあさ。こういうことかな。私が悪者なのかな。私間違ってること言ってる？
皐月　やよねえは間違ってないよ。きっと合ってるんだよ。でも。
弥生　今「でも」とか言った？　その続きは何。聞かせてよ。「でも私は、お母さんって呼べない」とか続けたら怒るよ。
皐月　そんなこと思ってないし言ってない。

真奈美　弥生！

びくっとなる弥生。

真奈美　今日はやめてあげて。ね。

そこにドアのチャイムが鳴り響く。

真奈美　誰か来た。

ブル転。

■シーン６　《過去・皐月１４歳・誕生日当日・夏・お昼前・浮島家》

佑花、不審そうに遠くを眺めている。その傍に悟が目を細めて立っている。

佑花　あの二人、車の横で何しているのかしら？

悟　さぁ。あの二人のことだから、ま、どっちかと言うと桜さんが問題起こすんだけど、どうせろくでもないことだよ。

佑花　関わらないほうが得策ね…って、ちょっと。

佑花、はけて、陽子を引っ張ってくる。

陽子　ちょ、引っ張らないでよ。待って待って待って。じゃあさ、

陽子はけて、今度は沙弥を引っ張ってくる。

沙弥　いーやーだー。

陽子　ここまで来たんだから。

佑花　あなたがそれ言う？

悟　沙弥、大丈夫だよ。笑顔で送り出してくれたじゃない、お兄さん。

沙弥　何が大丈夫なもんですか。

佑花　でもここでずっとのんきに立ち話してるわけにもいかないでしょ。

陽子　それはわかってるのよ。わかっているけれど、3年ぶりに帰ってきて何を言えばいいのよ。「弥生、皐月、大きくなったわね、元気だった」とか？

沙弥　「再婚したんだってねぇ。私のことを待ってくれるものとばかり思ってたわ」とか。

陽子　そんな軟弱なこと言えないわよ。未練タラタラじゃない。
沙弥　違うの？
陽子　はっきり言うわ。違う。
佑花　乗り込むわよ。
陽子　だから待ってって。
沙弥　心の整理がつかないの。
佑花　全く。
悟　じゃあさ、まず電話して様子を伺ったらいいんじゃない。

皆、悟のことを見遣る。

佑花　たまにはいいこと言うじゃない、弟よ。
悟　姉よ、俺だって考えているのだよ。唐突に家を飛び出して、東京で起業して、なんて馬鹿なことをと思われながらも軌道に乗せて、「いやぁ大変でしたねこの３年っていうものは」とかビジネス雑誌で答えてて、そんな姉を誇らしく思う。
佑花　もっと言うがいい。未来永劫奉るがよい。

沙弥、しぶしぶ携帯で智人に電話をかける。葛藤を見せながら。
コール音。そして智人が出る。

沙弥　あ、あ、あ、あ、私だけど。

切られる電話。

沙弥　切られたんですけど。怒ってるんですけど。
悟　それはあれじゃないかな。オレオレ詐欺ならぬ私私詐欺だと思われたんじゃない。
佑花　今のはちょっとねぇ。勇気！
陽子　あなたの電話によって我々はあの家に乗り込む事ができる。全てはあなたの電話にかかっていると言っても過言ではない。
沙弥　過言だよ。責任重大だよ。

沙弥、息を整えて電話をかける。

沙弥　あ、兄さん。

電話が切られる。

佑花　ちょっとちょっと。
陽子　負け犬が。
悟　ほら、今のは「アニーさん」って、きっと間違い電話だと思われて切られたんだよ。
沙弥　そうかぁ。なんで私アニーさんなんて言ったんだろう。誰だろうアニーさんって。
陽子　さぁ、もう一回行こうか。

沙弥、電話をかける。ぷつっと切れる。沙弥、３人を見遣る。目が訴えている。「もう無理だ」と。

陽子　(ポンと手を打って)じゃ、帰りましょうか。
佑花　待てぇ。これで帰るとしたら陽子、あなたも負け犬よ。
悟　姉さん、ひどいことを言う。ま、負け犬だろうけれど。
沙弥　私は負け犬決定なんだね。

悟、沙弥を慰めている。

陽子　負け犬？　この私が？
佑花　そうだよ。負け犬負け犬負け犬。あ、犬はかわいいよね。なんで負けたら犬なんだろう。雨の日にずぶ濡れになっている犬とか想像しちゃった。
陽子　わかったわよ。行きましょう。そして砕けましょう。４人まとまって飛びかかれば恐れるに足りぬわ。ははははは。
佑花　足がブルブル震えてるんじゃない。
陽子　なことないわよ。(歩き出そうとして足が震える)じゃ、行くわよ。誰が先頭？
沙弥　それはもうおまかせします。
陽子　じゃあ悟くん。
悟　いや、俺はちょっと、あれなんで。
沙弥　あれってなによ。
陽子　意気地なし。それでも男。このパーティーの中で唯一の男じゃないの。
悟　こんなところで性別持ち出さないで下さいよ。
沙弥　私たちの盾になってくれてもいいじゃない。
悟　骨は拾うさ。
佑花　その発言は減点だわねぇ。奥さん的にはどうなの？
沙弥　まだ奥さんじゃないですけど、ちょっと実家に帰らせてもらいます。

沙弥以外はしめた、と思ってニヤリと笑う。悪い顔だ。

悟　どうぞうどうぞ。
沙弥　そこだった私の実家！！
陽子　順番は決まったわね。行くわよ。
沙弥　ジャンケンしない？
陽子　しません。ほらほら。

直前の会話は移動しつつでいい。はけている面々も出てきている。鳴り響くドアチャイム。

智人、真奈美　誰か来た。

照明変化。音楽 in

■シーン７　《過去・皐月１４歳・誕生日当日・夏・お昼頃・浮島家》

陽子入り。不穏な空気が流れる中、真奈美と陽子が対峙する。

皐月　二人とも冷静に話し合おうよ。
陽子　この泥棒猫が。
真奈美　陽子さん、あなたは出て行ったんだから何も言えないでしょ、違いますか？
陽子　それでも夫を奪われるとは思わなかったわ。離婚届だって書く前にここを出たんだから。
皐月　お母さん。
陽子　あら、それはどっちのお母さんに言っているのかしら。古い方、それとも新しい方？
皐月　そんな言い方ない。
弥生　私もそう思う。言っていて辛くない？
陽子　そんなことで辛いとか思えるほどやわじゃないのよ私。
真奈美　私を恨んでいらっしゃるんですね。貴方が捨てた全てを私がもらったから。
陽子　だからあげてないって言ってるでしょ。
真奈美　でも貴方はあの日手放した。
陽子　違う。もらった気になってるんだったら、返しなさいよ。
真奈美　子供はものじゃない！　二人の娘の前でちゃんと理解できるように説明して下さい。謝って下さい！
智人　二人とも。ひとまず落ち着けって。座ったらどうだ？

陽子　私達の話に入ってこないでもらえるかしら？
真奈美　これは女同士の話し合いです。話し合いで済めばいいけど。

睨み合う二人。おろおろと様子を伺っている皐月。照明変化。

皐月M　なぁぁんてのは私の妄想で、実際に出会った私達は、特に荒れ狂うこともなく、いきなりカバンから包丁が出たりすることもなく。

照明変化。勢いよく真奈美に近寄る陽子。カバンに手を突っ込み、お土産を取り出して渡す。

陽子　これ、一応おみやげ。
真奈美　え、わざわざすみません。なまものですか？
陽子　佑花？
佑花　いい匂いのするバスソルトよ。
真奈美　じゃあ、冷蔵庫に入れなくてもいいですね。
沙弥　冷蔵庫に入れておいたらいつの間にか兄さんが食べちゃったりね。「ソルトだろ？ご飯にかけて塩ご飯」とか言いそう。
智人　言わねぇよ。今医者から塩分控えてくださいって言われてるんだよ。
沙弥　年をとったな、兄よ。
智人　年はとるさ人間だもの。
弥生　懐かしいな、この感じ。沙弥姉、おかえり。
沙弥　うん。ただいま。
悟　俺には。
弥生　えーと、どちらさまでしたっけ？
悟　あんまりだよ、やよちゃん。
弥生　冗談よ。悟くん。いらっしゃい。
悟　お邪魔してます。大きくなったね。
弥生　(思い出して)ロリコン治ってないんですか？
悟　ちょっとぉ。
沙弥　治ってない治ってない。もっと悪化。都会の子供はいいよねぇ。とか言ったりして。
悟　ちょっとさ、俺の言葉、勝手に端折らないでくれる。あれはさ「都会の子供はゲームばっかやってるって聞いたけれど、それはそれでいいよねぇ」ってそういう話だから。
沙弥　同じよ。
悟　どこが？　え、どこが？

由紀子　まあ同じですね。物事は四捨五入です。そうすればほぉらすっきり。

照明変化。誰もが言葉を見つけられない。

皐月M　ゆきちゃんは昔からちょっとあれ系なもので。（客席に小声で語りかけるように）とまぁ、こんな感じに和やかムードです。…でもなんだか、すっきりしません。彼女が言ったように四捨五入したら少しはすっきりするのでしょうか、私のもやもやは。思春期特有の過敏な反応というやつに悩まされている私を残して、3年という月日はなかったかのように打ち解けています。きっと皆さんが私よりも大人だってことなんでしょうね。…（皆を眺めて）いいな、大人は（簡単に割り切れて）。

陽子　（悟から渡されたドンキの袋を抱えて）これはあとでいいか。

皐月　え、なにそれ、ドン・キホーテ？　わかった、私の誕生日プレゼントだ！

陽子　ドン・キホーテには誕生日プレゼントは売ってません。いいからいいから。

皐月　気になる。

真奈美　慶さん。

慶　はい？

真奈美　ケーキは？

慶　なんでですか？

真奈美　なんでですかってなに？

慶　なんでですかってなにってなんですか？

桜　いまいります？

真奈美　いや、取りに行ってもらって大丈夫だった？　問題なかった？

慶　全然大丈夫です。ちゃんと持ち帰ってきました。持ち帰ってきたんです私。

桜　私達！

桜を睨みつける慶。

由紀子　大丈夫ですよ。だってケーキ取りに行くだけなんですよ。私にだってできました。

佑花　まあ、ろうそく付け忘れたけどね。

由紀子　それは言わなければなかったことにできますから。

皐月　いや、できないできない。なかったろうそくの代わりにお父さんが紙にろうそくの絵を描いて、「ほら吹き消しなさい」って言った時は驚いたよ。

智人　でもちゃんと吹き消せただろう。

皐月　まさか2枚目に吹き消されて煙が漂うみたいな絵も描いているとは思わなかった。

由紀子　プロの仕事ってやつですね。

弥生　なにやってんだかとは思ったけどね。盛り下がらずに済んだからいいけど。

皐月　で、ケーキは？
慶　大丈夫です。

変な間。

弥生　その回答おかしくない？　大丈夫ですって？
桜　ケーキ自体は注文通りで問題なかったという意味合いの「大丈夫です」です。
真奈美　じゃあ冷蔵庫にしまってくれたの？
慶　え？
真奈美　だからケーキ？
桜　はい。本日のメインですからね。冷蔵庫でひえひえに冷やしております。
由紀子　冷蔵庫とか言いながら冷凍庫に入っていたらびっくりですよね。
桜　そこまで馬鹿じゃないよ、慶だって。
慶　なぜに私の名前を出す。
由紀子　慶さんが冷凍庫に？
慶　いや冷蔵庫？　まあ、どっちがケーキをどこって話をするとあれだけど。
由紀子　じゃあケーキがアイスクリームになる前に冷凍庫からは出してくださいよ。
慶　だから入ってないって。
桜　慶。そんなこと言ったらさ、冷蔵庫に入れてないみたいじゃない。
慶　だから入れてないじゃない。
由紀子　え？　なんですか？　冷蔵庫にも入れてないんですか？
慶　え？　あ、冷蔵庫って言った？　冷凍庫って聞こえたわ。
由紀子　あやしみ。
皐月　楽しみだなぁケーキ。もうケーキだけあればいいもの。
真奈美　(衝撃的な顔をして)ケーキだけでいい？
皐月　あ、ああー、違う、そういう意味じゃなくて。
真奈美　そうよね。メインはケーキよね。そそ、ケーキだけドドーンとテーブルに置かれていれば。
弥生　あーあ、お母さんいじけちゃったじゃない。
真奈美　いいのよ、やよちゃん、私の料理は、朝早く起きてやってきたことは、ええ、あったらあったでそれはそれでね。
皐月　めんどくさい。
弥生　めんどくさいはないでしょ。確かにめんどくさいけれどさ。
真奈美　二人して。いいわよ。もう料理出さないから。
陽子　家族してるわねぇ。
弥生　おかげさまで。で、どんなケーキ？

桜　えーと。(ちらりと慶を見て)
皐月　ショートケーキだよね。こういうやつ。
と言ってよくわからないジェスチャーでケーキの形なのか美味しさなのかを一生懸命に説明している皐月。誰もわからないがその必死さが微笑ましい。
真奈美　苺がのったやつでしょ。わかってるわよ。皐月ちゃんがイチゴのショートケーキが一番好きだって。お父さんから聞いたから。
弥生　オーソドックス。
皐月　お姉ちゃんは食べなくていいよ。
弥生　なんでそぉなる。ただオーソドックスって言っただけじゃない。
皐月　その言葉に不満が滲んでいるんだもの。今日は私の誕生日だもの。やよねえの誕生日じゃないもの。
弥生　わかってるって。私の誕生日には3段のチョコミントケーキを発注よ。ね。
真奈美　はいはい。
弥生　デコレーションはねぇ、
由紀子　踊っている7人の小人が乗っているんですよね。そしてサンタが小躍りしているっていう。
悟　それってクリスマスじゃない？
皐月　(全てをスルーして)早く見たいなぁ、食べたいなぁ。
由紀子　トナカイがムチを他のトナカイに向けて打っているっていう。
悟　だからそれってクリ、
沙弥　相手しちゃ駄目よ。
悟　でもさ。
皐月　楽しみだなぁ。ね(と周りにいる人達に投げかける)。
由紀子　楽しみですねぇ。トナカイ。
陽子　(皐月にドンキの袋を差し出す)ん。
皐月　え？
皐月、袋を渡されて中を見る。陽子、グッジョブ私とでもいうように胸を張って親指を立てる。袋の中からパーティー帽子を取り出す皐月。
皐月　なにこれ？
陽子　本日の主役セット。あなたもこれを身につければ今日から主役！っていうね。じゃ、ケーキよろしく。
慶　(ケーキを打ち消すように)ははははは。

陽子　ケーキ。
慶　ははははは。
陽子　ケー
慶　ははははははは。

ブル転。車の走行音、停車音。ドアの開閉音などで間を埋める。

■シーン８　《過去・皐月１４歳・誕生日当日・夏・お昼頃・浮島家・前庭（駐車場）》

照明変化。慶の回想。先程佑花たちが目にした光景。

慶　桜さん、あなた何をやってくれちゃったのこれ。
桜　違うよ。
慶　何が。
桜　車のドアが閉まったのは私のせいじゃないと思います。
慶　自動ドアじゃないし。物理的に力を加えなければ扉は勝手になんか閉まらないんだよ。高校の物理で習ったでしょ。
桜　ごめん、私文系なんだ、これでも。
慶　いいよ、文系でもなんでも。じゃあ、小学校の理科でも習ったでしょ。
桜　そんなに昔のことは忘れてしまったよ。
慶　状況を整理しようじゃないか。
桜　どうぞ。
慶　私達はケーキを取りに出かけた。途中まであなたが運転して、私はこうやって片手でケーキを押さえていたわ。
桜　はいはい。
慶　ふと窓の外を見たら、おいしそうな雲がふわふわ浮いているわけ。あれはソフトクリーム、あれはクリームパンかしら、なんていうスイーツな妄想パレードが私の頭の中をよぎって行って、からの急ブレーキ。とっさのことだったから危うくケーキを落としそうになりつつこうなったわよ車の中で（と言って前後に揺れてみせる）で、どうしたの？　って私聞いたらあなたなんて言った。「お腹減った。ポテチ食べる」そう言うや否や車を停めてコンビニに。コンビニから戻ってきたあなたは「交代」って言って、そこから私が運転を代わった。これが今思えば全ての間違いだった。
桜　遠足にお菓子は３００円だとしても必要なものよ。
慶　遠足じゃないから。
桜　遠足はコンソメ味に限りますな。おいしゅうございました。

慶　…いらなかったわぁ。私一人でよかったわぁ。
桜　そんなこと言わないでよ。悲しくなってしまうじゃない。

桜、泣いているふりをしつつ慶に手を伸ばし、その服で指のポテチの汚れを拭おうとする。

慶　(ので)拭こうとするな、油を。
桜　あらバレた。
慶　で、よ。後部座席で揺れたり弾んだりしているケーキをなんとか無事に持ち帰ったわね。
桜　無事かどうかは箱を開けるまでわかりませんぞ。家につくまでが遠足だと申しますからなぁ。
慶　あなたが言うなあなたが。そして二度と言わないからよく聞いて。遠足ではない！
桜　バナナはデザート、バナナチップスになるとお菓子、あれおかしくない。
慶　(無視)私は一刻も早く車を降りたかった。何故ならポテチの匂いで気持ちが悪かったからだ。
桜　同じバナナなのに。これは世界の七不思議に追加して貰う必要が。
慶　ない！　私は鍵を挿していることを認識していたから、扉を開けたままにして、外の空気を吸っていたの。それをあなた。
桜　親切じゃない。
慶　親切じゃないじゃない。
桜　でも、よーくお聞きよ、私がやったことと言ったら「些細な親切」の他になんと表現できようか。いいですか？　私再現しますから。
慶　やめてよもう。
桜　私、あなたが車を降りていくからね、私もこうして降りたわ。扉もしっかり閉めて、颯爽とあなたに近づいて行ったの。何故かって？　指を拭くためよ。(慶、頭を抱える)聞いて。重要なのはここからでしょ。あなたに近づいて行った私、ここに立つ。邪魔だわねこの扉。つーか開けたものは閉めなさいよ。で、扉を閉めたのね。どう、真実に辿り着けたかしら。
慶　一発殴られるのと、一発蹴られるのとだったらどっちがいい。私が辿り着いたのはこの結論ね。さあ選びなさい。どっち？

慶、桜の肩を掴んで揺する。そのどさくさに紛れて指を慶の服で拭いている桜。慶は気づいていない。

桜　(揺すられながら)暴力では解決できないことがあります。そして私達が自分たち

の行いについて罵り合っている間に、刻一刻と問題は大きくなっていると思われます。

慶　何よ問題って。

桜　車の中にはケーキがあるのよ。

蝉の声がしている。慶、はっとして車を見つめる。

桜　そう、お気づきですね。この夏、締め切られてエアコンも付いていない車の中がどうなるか。そしてケーキがどういう末路を辿るか想像できましたね。生クリームが溶けて、もう、無残な姿になっていくのを我々は指をはむはむしながら見守る他ないのです。よかったわね、私達に箱の中を透視する能力がなくて。

桜から離れていく慶。

桜　あのさ。

慶、桜を見遣る。

桜　はむはむって表現かわいくない？

慶　お前うるさい！

桜　(逆ギレするように)だから私言ったのよ。チーズケーキとかにした方がよくないですかって。

慶　誕生日はショートケーキって決まってるのよ昔から。

桜　捨てろ捨てろそんな固定観念。これからは誕生日ケーキはモンブランでいきます。

慶　チーズケーキはどうした。

桜　いやもうケーキもやめましょう。そうなれば私達のしでかしたことは責められなくなります。ケーキを一つ無駄にしたという事実があるだけですから。

慶　十分責められるわ。食べ物無駄にして責められるわ。それにケーキがなければハッピーバースデーの空気感生まれないから。年の数だけもらってきたロウソクは何に刺せばいい。

桜　あ、この際だからもう窓割ろう！

慶　お前の頭かち割ったろうかぁ。

慶、桜はけ。スリッパに履き替える。回想終わり。皐月、帽子をかぶる。

■シーン９　《過去・皐月１４歳・誕生日当日・夏・夕方前・浮島家》

動きがある中で、まるで言い忘れていた事を思い出したように陽子が口に出した「引き取りにきた」という強い言葉。

皐月　今なんて。

陽子　だからね、娘を引き取りに来たって言ったのよ。

凍りつく空気。智人を見る者、真奈美を見る者、弥生を見る者、皐月を見る者、人によって視線の行方は変わる。

由紀子　なんですかこの急展開は。ＣＭ挟まなくて大丈夫ですか？

慶　テレビドラマじゃないんだから。そして少し黙っていようか。

由紀子　はい！

佑花　待って。こういのはさ、進め方が肝心なのよ。なんでいきなり切り込むかな。ごめんなさい。まずは私が謝らないと始まらないと思う。

智人　はい？

佑花　陽子を唆して東京に連れて行ったのは私だから。すべての始まりは私だからさ。

沙弥　すべての始まりは私、なんかカッコよくない？

悟　しーー。

陽子　でもさ、決めたのは結局私だから。きっかけは佑花だったとしても。

佑花　怒っていらっしゃいますよね。もう顔見ればわかりま(顔を見る)。うーん。

皐月　わからなかったんだ。

弥生　しーー。どうぞ。

佑花　私が二人を別れさせたようなものです。それについては本当に、謝るタイミングがないままに来てしまって。あの。

智人　いいですよ、それについては。

佑花　そんなこと言って。一言、一言ね、許すよと仰ってくれれば、くだされば。

智人　ああ、じゃあ、許す。許しますよ。

佑花　そう。そんな簡単に許されるとは思っていないんです。言ってくれなんて何言ってんだ。頭に包丁でも突き刺してこい。そのぐらいのインパクトで謝れと仰るのであればこの私、身を捧げます。刺してきます。

智人　あのぉ、あれ、俺言ったよね。

皐月　お父さん。きっと聞こえてないんだと思う。

智人　え。小声だったかな。あ、滑舌？

皐月　なんだろうね。あまりにあっさりと言われちゃったから理解が出来なかったとか。

智人　なるほどね。え、じゃあ、どう言えばいいんだ。

佑花　智人さん。私もうこうなったら土下座します。何度でもします。ご満足頂けるような角度で折れ曲がります。
智人　待って下さい。あの佑花さん。
佑花　いえ、待ちません。一刻でも早く折り曲がって。
沙弥　ちょっと、悟くん。
悟　ああ。姉さん、落ち着けって。
智人　佑花さん、俺の話、聞いて下さい。
佑花　聞きません。聞けません。顔も見れません。
弥生　さっき見てたよね。
皐月　しーーー。
智人　佑花さん！
佑花　はいっ！
智人　よかった。ようやく聞こえたみたいだ。
佑花　なんですか、私、もうあらゆるパターンで土下座のイメージさせてもらっていますから。３０パターンのうちどれがよろしいですか。おすすめは２５番です。

佑花、勝手に２５番の土下座をやろうとするがうまくいかず、これは２２番などと言って葛藤している。

由紀子　土下座って土下座だよねぇ。あれ、土下座じゃないよねぇ、体勢的にも。
慶　気持ちがあれば形はなんだっていいのよ。
悟　しかしなぁ、姉が土下座しているところなんて弟としては見たくないよな。
智人　あのぉ、俺、これからとても大事なこと言いますからよく聞いてくださいね。
佑花　はい。もうなんでも。イメトレはしっかりと。
智人　佑花さん、俺は怒ってもいないし、貴方を責めるつもりもないです。
佑花　…はい？
智人　陽子が出ていく決心をしたのは、俺と彼女の問題だと思っています。あなたが陽子を誘ったことはあくまで１要素に過ぎない。責任がどうのこうのって言うんだったらその決断をさせるに至った俺の責任です。だからもういいんです。そのせいで、弥生や皐月には辛い思いをさせてしまって、謝るとしたら俺が子どもたちに対してだと思います。
弥生　そんなの望んでないから。
皐月　そうだよ。うん。まあ、ショックがなかったと言ったら嘘だし、お父さんもお母さんも大人なんだから、
陽子　大人なんだから、なに？　いいわよ、言ってくれて。
皐月　いやだからさ、なんだからとか色々思ったこともあったってこと。今更でしょ、そ

んなこと言い出したって。
智人　お前ら。
皐月　お母さんが出て行って。それからお父さんは二人分、ちゃんと私達を育ててくれた。頑張ってくれました。だから、それでよいと思うよ。
由紀子　いい子に育ちましたねぇ。
慶　何目線よ。
桜　強いて言えば神の視点？
弥生　しーーーーーーっ！

お口にチャックの３人。

佑花　そう言ってもらえるとずっと胸につかえていたものが取り除かれていく気がします。私、あっちで彼女と一緒に仕事している時も、合コンに参加している時も片時も智人さんに、弥生ちゃん、皐月ちゃんに申し訳ないことしたと思っていて。
智人　はは。じゃあ、これからはすっきりした気持ちで合コン行って下さい。なんてね。
佑花　ありがとうございます。行かせてもらいます。
皐月　それは話違くない？　ずれてない？
弥生　それが大人ってものよ。人間ってものよ。
真奈美　二人とも。
弥生　ごめん。
真奈美　誰だって合コンの一つや二つ行きたくなるものですよ。でも、あれ、佑花さんって既婚じゃなかったかしら。え、え、え、え、それはあれ、それは、え。
弥生　お母さん、落ち着こう。私達がそわそわしたって仕方がないことよ。
佑花　どうかした？
皐月　いえなんでもないです。ちょっと、もうケーキを出しちゃおうかなって。
慶　もう出しちゃおうかなって感じで流れで出してもらっても困るんですよ。こちとら汗水垂らして車ぶんぶん飛ばしてナビもろくにしないぽんこつナビゲーター積んで行ってきたんですから。
桜　え、ポンコツ？
由紀子　まあ、ナビしなければ何しに行ったんですか？　ポンコツでしょ。
桜　ポンコツ。音は可愛いんだけどなぁ。意味知ってるからなぁ。
陽子　あのさ私の話をそろそろしたいんだけど。二人を引き取、
智人　(敢えてはぐらかすようにテンションを上げて)だがしかし妹まで連れて行ったのは許したわけじゃないですからねぇ。あ、佑花さんを責めているわけじゃなくて。これは単純に沙弥との話なので。

陽子、話をそらされたと思って小さくイラッとしている。

陽子　（二人を引き取りに来たの）

佑花　（陽子にかぶせて）あーーーーー。

心配そうな顔で様子を見ている皐月の帽子を直してあげる悟。

皐月　悟くん。

悟　大丈夫。

陽子、自分の番がまだであることを諦めと共に理解して少し離れる。

沙弥　どうして私のことをここで持ち出すかなぁ。別問題でしょ。

智人　だから別問題だと言っている。お前もなぁ。

沙弥　だからお前って呼ぶな。

佑花　でもあれは、沙弥ちゃんが勝手に来たっていうか。

悟　姉さん、それはあんまりだ。見損なったよ。

佑花　あなた達を雇う余裕まではなかったけれど、どうしてもって言うから。

悟　だから俺は諦めて沙弥を雇ってくれって譲歩したじゃないか。

佑花　だから雇ったでしょ。何よ、何がご不満ですか？　これ以上にどういう待遇をしろと。

悟　何も言ってないよ。たださ、勝手に来たってのはちょっと違うだろう。

沙弥　勝手に行ったからねぇ。

悟　でもちゃんと行くって連絡したんでしょ。そう聞いたよ。

沙弥　ごめん。

悟　え？　何謝られてるの俺？

沙弥　実はさ、してないんだ。

悟　なんで。

沙弥　断られるかもしれなかったから。だから自分には引き返せる場所がないって言い切ったほうが強いかなって。

悟　なんでって俺が言ったのはさそうじゃなくてね。俺になんで言ってくれなかったかってこと。

沙弥　余計な気を回してほしくなかったんだよ。

悟　余計？

沙弥　だってあっちに行くってなった時のこと覚えてる？

悟　もちろん。

沙弥　私達まだ付き合ってなかったよね。正確には。
悟　えーと、どうだったかな。
沙弥　なかったの。でも悟くん、こっちでの仕事捨てて、私についてきた。
悟　そうだよ。ついて行ったよ。心配だったから。迷惑だった？　まるでストーカーだって思ってた？　俺そういうこと言われようとしてる？
桜　そういう痴話喧嘩はチワワも食いませんよ。
由紀子　あの、桜さん。私達は黙っていた方が、そんな気がします。
桜　…これを人は成長って呼ぶのかしら。

弥生、桜を慰めるように肩に手を置く。

沙弥　悟くんの人生を私の身勝手で想定外の方向に押しやってしまったんじゃないかって。いつか後悔することになるんじゃないかって。
悟　余計な気の回し方しないでよ。俺は沙弥の傍に居たいって、それだけだから。それ以外はあってもなくてもいい。ただ君がいてくれれば。
沙弥　ありがとう。
悟　だから隠し事とかなしでさ、言っておいて欲しいんだよ事実を。今こう思ってるよとかこうするよって。だって俺は君の夫なんだから。
沙弥　今度からそうするよ。
皐月M　沙弥姉は沙弥姉でとても幸せそうでした。うまく行ってほしいなこの二人にはと思いながらも、よくよく考えなくても、悟くんの「ただ君がいてくれれば」みたいな台詞のくささに、誰も何もツッコミを入れられないこの状況は如何に。私ですら本人前にしてはツッコめなかった。愛の力は偉大です。
由紀子、桜　くっさ。
皐月M　前言撤回。さすがのゆきちゃん、桜さんコンビです。頭を抱えている慶さんの苦労が空気中ににじみ出ています。なんだかそういうくささはお父さんに似ているような気もして。なんだか憎めないんですよね悟くんって。
智人　ほんとくっさいことを平然と言うんじゃないよ。みんな引いてるじゃないのさ。

みな、じとっとした視線を智人に向けるが気づかない。

皐月M　本人は気づかないもんですよね。

皐月、セリフを言いながら肩から「本日の主役」みたいなタスキをかける。

智人　という余興を挟みつつ、さてと本題に。……ん？　あれ？

真奈美　どうかした？
智人　いや、聞き間違いなのかな。気のせいかな。
皐月　どうしたの？
智人　いや、さっき彼、夫。今夫って言ったような。え、言わなかった、このすっとこどっこい。
真奈美　言ったと思うけれどすっとこどっこいはないんじゃない。
智人　すっとこどっこいが言っているとすれば、これは看過できないことじゃないか。
　　え？　どこかの馬の骨が夫。え、そうなると、あれか、義理の、義理の息子？
真奈美　違う。義理の弟。
智人　おとーと？
悟　義兄さん。知らない仲でもないんだし馬の骨って。
智人　義兄さんとか言われたくないんだけど。誰も許可してないし。
佑花　うちの弟がすみませーーーん。どうやら私達家族になったらしいので色々と今後とも宜しくお願いします！
智人　運命よ、ここに来て畳み掛けてくるな。俺はもっと平穏な人生を送っていたはずだ。
弥生　平穏な人生送っている人は離婚とかしないんだよ。ああ、別に非難はしてないよ。
智人　突き刺さるんだよなぁ。非難している感じに言われなくてもさ。なあ皐月。
皐月　でもさ、沙弥姉たちがこうなるってのは薄々あったよねぇ。

皐月、と言いながら、智人にタスキの文字をアピールする。スルーされるので表裏逆につけたんじゃないかなど確認をしたりする。

智人　え、気づいていたのか？

みなそれぞれ頷く。真奈美そっと智人の肩に手を置く。「気を落とさないで」と言っているようだ。

弥生　おめでとう、沙弥姉。
沙弥　なんか恥ずかしいな。でもありがとう。で、兄さんも祝福してくれるんだよね。
智人　えー。
真奈美　えーじゃないでしょ。しっかり。お兄さんでしょ。
智人　俺は今とても卒倒しそうになっているが。沙弥、結婚は墓場だぞ、とか言うつもりはない。お前が幸せだって感じてるならそはそれでいい。相手が運命の相手であろうとなかろうと。楽しいことばかりがこの先にあるかなんてわからないし、苦悩したり辛い日々があったり、喧嘩する日も増えるかもしれない。そういうこともひっくるめて一緒に歩いていこうという相手として彼を選んだというならば、俺から

言うことなんて何もない。沙弥、幸せか？

沙弥　悟くんはね、とーーっても頼りないし、カッコつけたがるけど、私のことを第一に考えてくれてる。だから、私幸せだよ。

智人　そうか。なら、うん。おめでとう。

沙弥　ありがとう。

悟　ありがとうございます。

智人　悟くん。

悟　はい！

智人　あとで一発殴るから。

悟　なんでですか？

智人　通過儀礼だろ。

佑花　よかったよかった。

悟　よくない。

「おめでとう」という声がちらほらと若い二人を祝福する。

皐月M　幸せそうに微笑み合う二人を見ているととても心が和みます。結婚っていいかも。いや、いいんですよねきっと。うちの両親が離婚したというのは事実ではあるけれど、再婚するぐらいなんだから。ただ、私達は一つ忘れていました。忘れそうになっていました。母の存在を。ずっとさっきからちらちらと私たちを伺いつつも、いじけつつも、話に割って入るタイミングを見計らいながらため息をつく母を。父はそれに気付きつつも敢えて気づかないふりをしています。露骨です。娘を引き取りに来た。言葉通りだとは思いながらも、その話の行方も気になって仕方がない１４歳の私でした。誕生日、これはもう笑ってしまえるぐらいの台無しレベルです。

由紀子　皐月ちゃん。

皐月　え？

由紀子　あれ、どうします？

皐月　あれ？　（気づいて）お花？

由紀子、神妙に頷く。

皐月　ゆきちゃん、ごめん。もしかしたら不要になるかも。そうなったらさ、ゆきちゃんに上げるよ。

由紀子　だめだなぁ、それは。

皐月　どうして？

由紀子　誰かにあげようと思って買った花とか贈り物ってさ、とても想いがこめられてい

るんだよねぇ。私には重いよねぇ。受け取る資格ないわぁ。

皐月　じゃあ、捨てていいよ。

由紀子　それも駄目でしょ。花がかわいそうでしょ。捨てられるために育ったわけでも売られているわけでもないんだからさ。お花のことを何だと思ってるわけ？

皐月　怒らないでよ。今日は私の。

由紀子　誕生日でしょ。知ってるよ。書いてあるもの「本日の主役」って。でもそれとこれとは関係ないでしょ。必要だから買ってきたけれど、やっぱいらないから引き取ってとか捨ててとか。

皐月、ふとその買ってきてくれた花に対して自分を重ね合わせた。まるで私だ。

皐月　ごめん。ゆきちゃんの言うとおりだ。もし渡すことができなくても、それ私に頂戴。ちゃんと育てるから。

由紀子　もちろん。でも、渡せるといいわね。

陽子、窓外のヒマワリを眺めている。傍に真奈美やってきて二人の母は庭を眺めている。そこに会話はない。ぎすぎすした空気もない。ただ真奈美は寄り添っている。

真奈美　ヒマワリ、今年も見事に咲きました。

陽子　ええ。貴方が？

真奈美　はい。陽子さんが出て(行ってと言おうとして)…せっかくここまで手入れしたのに枯らしてしまってはと思って必死です。

真奈美、そう言って笑ってみせる。

陽子　あのヒマワリね、皐月が生まれたときに庭に植えたのよ。あの人と。

真奈美　そうなんですか。

陽子　二人がね、時には喧嘩して、ふざけ合って、競い合って、お互いに意識しあって、でも仲よくて。目標に向かって伸びていってほしいって想いでね。

真奈美　ふたりとも、いい子に育ってます。

陽子　喧嘩は？

真奈美　絶えません。

陽子　大変だ。

真奈美　ほんと。

二人笑う。

陽子　でも、嬉しいでしょ。
真奈美　はい。
陽子　うん。お母さんはそんな娘たちを見ていることが嬉しいのよ。

真奈美、「だから引き取りに来たんですか？」と聞きたくなる気持ちを抑えて、陽子を見遣る。そんな二人に視線を移す智人。

智人　さてと。(陽子をみつめて)現実逃避ばかりはしていられないか。じゃあ、話を続けようか。
陽子　よかった。世界の片隅に取り残された気がしたわ。
智人　で。
陽子　うん。子どもたちを引き取りたい。
皐月　なんで。
陽子　3年前、確かに私はあなたたち、娘をここに置いて行った。その判断に間違いはなかったと思う。ようやく一緒に暮らすだけの準備が整ったの。
弥生　今更だよね。
陽子　あなたには3年前聞いたわよね。「一緒に暮らさない」って。
皐月　え？
弥生　(皐月の反応を気にしつつ)そうだったわね。「家を留守がちにするけど、もう14なら大丈夫よね」って。
陽子　貴方はなんて言ったかしら。
弥生　もう忘れたわよ。
陽子　あなたこう言ったの。『私はここが好きだから。それに妹を一人残して行けるわけないでしょ』だって。
弥生　何覚えてんのよ。
陽子　一言一句間違えなかったでしょ。ほんと、くさすぎて覚えちゃった。これは家系？
弥生　あ、悟くんは血縁じゃなかった。
陽子　ここで言う必要なかったでしょ。なに、え、何をしに来たのよ。人を辱めに来たの？
弥生　だから、引取にだって。でも、あのときの貴方、とてもお姉ちゃんだった。いい子に育ったなぁ、なんて思った。育てた私が言うんだから間違いない。
陽子　更にいい子たちに育ったでしょ。
弥生　だから二人とも引き取りに来た。それならいいでしょ？

弥生、皐月を見る。そして智人を見る。

弥生　お断りします。
陽子　どうして？
弥生　私もう一つ付け足したと思うけど。「私は皐月を残していけない。それに私はここで、家族と一緒に暮らしたい」って。
陽子　それじゃあさ、私はもう家族じゃないの？　ここを離れたら家族じゃなくなるの？　じゃあ皐月の答えによっては少しは考えてくれる？
弥生　お断りします。
陽子　あ、これは反抗期というやつかしら。素直になれないっていう。
弥生　違うよ。だって、あんなダメダメなパパさん、放っておけないでしょ。
智人　え、俺？

桜、慶、由紀子、そっと目を伏せる。泳がせる。遠くを見つめる。

智人　そっかぁ。ダメダメかぁ。
陽子　皐月は。

皐月、帽子をかぶり、「本日の主役」タスキをかけていて。皆の視線が集まる。

陽子　お母さんと暮らしたいでしょ？
皐月　私は…

悟、卓上の帽子を手に取り、沙弥にかぶせ、自分もかぶる。

沙弥　ちょ、なに？
悟　ケーキ、食べましょう！
沙弥　何言ってんの？
悟　だから俺言ってるじゃない。こういうの嫌なんだって。なんか大人が寄ってたかってさ、子どもたちに何を選択させようとしてるんだよ。弥生ちゃんは17だし、皐月ちゃんなんて14になったばかりなんだよ。今日誕生日なんだよ。バースデーソングだってまだ歌ってないんだ。こんな辛い誕生日、やだよ俺は。
沙弥　悟くん。
悟　ケーキは？　どこ？　冷蔵庫？
由紀子　冷蔵庫？　ですよね、慶さん。
慶　え、いや、ちょっと待って。なんだお前は。突然テンション上げちゃって。頼んでないから。
悟　え？　いや、なんだと言われても。

慶　いやさ、ここのうちのことはここのうちのことでさ。関係ないじゃん。
悟　いやいやいや、弥生ちゃんも皐月ちゃんも俺にとっては何？
沙弥　義理の姪かな。
悟　だから関係なくない！
慶　だとしてもケーキとか突拍子もないこと言って。なにがケーキか。今のこの状況で食欲とかわかないでしょ。
沙弥　食欲とかじゃないんじゃないかな。ただ悟くんはさこういう空気を壊したいって言ってるんだよ。食べるとかじゃなくて。
慶　ケーキは食べるものです。眺めるものじゃありません。
桜　なんか私が言いそうなこと言ってるね、慶。
由紀子　慶さん落ち着いて。私たちが口論するような話じゃないです。
桜　まあまあ、何か理由があるんじゃないの。
慶　桜！　え、なに、もしかして私にすべての責任を負わせようとしてる？
桜　何のことやら。
智人　どうかしたのか？
真奈美　もしかしてケーキないの？
慶　あります。あるわよね？
桜　ありますよ。持って帰っては来れたんですから。あと一歩というところで。

佑花、冷蔵庫を探りにはける。

陽子　ちょっと。私は皐月の話を聞こうとしているの。なんでケーキの話になっていくのよ？　ケーキは逃げないわ。それよりも皐月どうなの？
悟　ケーキは持って帰って来ている。けれどないってこと？　え、なに？
由紀子　食べちゃったんですか？
桜　まさかぁ。いくら私でも1ホール食べられないよ。
沙弥　とか言いながら半分ぐらい味見とか言って食べちゃったんじゃないの？
桜　私だって食べていいか食べちゃ悪いか判断出来るから。誕生日ケーキはみんなで食べるってわかってるから。

佑花入り。

佑花　冷蔵庫になかったわよケーキ。
沙弥　怪しい。どこに隠したの？
慶　なに、ここは名探偵の集い？
桜　2時間ドラマの帝王、ミスターフナコシは誰？

沙弥　（ずっと何か考えていて）あなた達さぁ、車の傍で口論してなかった。

黙り込む二人。テンションが急激に下がっている。

佑花　ケーキを出すことを拒み、冷蔵庫にはないケーキ、そして車の傍で言い争っていた。なるほどね。つまりケーキは、…どこだ！

悟　わかったんじゃないのかよ姉さん。

佑花　ここでわかったなら探偵業に転職するわよ。

弥生　ケーキ、車にあるんじゃない？

沙弥　え？

弥生　ケーキの話していて車の傍で言い争っていたことを指摘したら黙ったわけでしょ。じゃあ、ケーキと車の関係は？

由紀子　そういうこと？

慶　えーと、いや、私のせいじゃないと言えると思うんですよこの件については。

桜　そうやって一人で助かろうとする。

慶　だってあなたが。

智人　ケーキは車なんだな。

智人、出て行きかけて。

慶　すみません。鍵を閉じ込めてしまって。

真奈美　智人さん、鍵。

真奈美、ポケットから取り出したキーケースを放る。キャッチする智人はけ。

真奈美　慶さん、桜さん、嘘で覆い隠したら駄目よ。真実はすぐに露見するんだから。

慶　すみません。いや、悪いことしてるなぁとは思いながら、つい。

桜　右に同じ。

真奈美　桜さん！

桜　ごめんなさい。

真奈美　なんだかとても大きな子供が出来たみたいだわ。

沙弥　ほんと。

陽子　（その状況を厄介に思いながらも）ねえ皐月。私はあなたの答えを聞かせてほしいの。貴方の口から出た言葉を聞けば、それがどんな回答であれ納得できると思うから。もちろんＯＫ以外は聞きたくないけれど。

皐月　ねぇお母さん。

陽子　うん。

皐月　今からすっごく子供みたいなことを言うけどごめん。だって私さ、まだ１４歳、今日で１４歳で子供だからさ。……ねえ、なんで今日？

陽子　え？

皐月　知ってる？　今日私が誕生日だって？　ううん、３年前もなんでさ私の誕生日を狙って「ここを出ていく」宣言したのかなお母さん。私、誕生日が嫌いになりそうだよ。最早祝いじゃなくて呪いだよ。

陽子　それについてはごめんなさい。

皐月　ごめんでなんでも済むんだったら警察なんていらないんだよ。みんなさ、私の誕生日だってことでお祝いに来てくれているのに、しれっと現れてさ、お土産、とか言ってさ、バスソルト？　はっ、バスソルト。

佑花　別のが良かったかな？

皐月　そうじゃない！　え、私別のが良かったって言った？　言ってないでしょ。そういう大人の勝手な解釈で子供は犠牲になってるの？　大人にとって私達子供はなに？　足枷なの？

陽子　言ってないでしょ。

皐月　言った言ってないの話してない！　私は事実を指摘してるの。お母さんは家庭を捨てて出て行った。それは何！？　大人ならね、いや、親ならね、ちゃんと子供育てきってから好きなことしてよ。それまでは子供中心に生きてよ。それが出来ないんだったら子供なんて産むな！

間。

皐月　大人はいいよね。色んなことが割り切れて。子供はね、すんなり割り切れないんだから。そういうの察してよ。耐えてるんだよ。笑顔で泣いてるんだよ。でも私はあの日、お母さんが出て行くって言った日、人生に絶望したけれど同時に絶対泣いてやるものかって思ったね。こんなにも簡単に絶望する生き物なんだったら、私はずっと絶望感じたら笑ってやるって。３年分の想い、受け取れ！

間。

真奈美　割り切れてなんかないんじゃないかな。大人だからって。

皐月　え？

真奈美　だから今皐月ちゃん、大人だから割り切れるとか言ったけれど、そうじゃないと思うなって。ごめん、私が口を挟む話じゃなかったね。

周囲を見渡すとどことなく人生の割り切れなさというか、子供たちの前だから必死で覆い隠していた感情とかがうっすらと立ち上がったよう。間。

皐月　真奈美さんも？

真奈美　かもしれない。

皐月　私が、お母さんって呼ばないから？

真奈美　かもしれないけど、でもそれはいい。私は二人の母親になるんだって決めたときから問答無用で愛することを決めたから。だから私の中ではもう母親になってる。割り切れてるよ。

皐月　それはなんだか切ないよ。

弥生　そういう切ない状況作ってるのあんたじゃない。

真奈美　こら。

皐月　自分だけがって思ってた。再婚したってのは別に反対とかしてない。ただ、お母さんが二人出来て、一人は出て行ったけれど、だから一人なんだけど、そう簡単に割り切れないでしょ。

真奈美　わかるよ。だから言ってないでしょ。今日からお母さんって呼びなさいとか。

皐月　言われてないけどさ。

真奈美　別にいいじゃない、二人いたって。母親が。

皐月　そんなこと。

真奈美　私は気にしない。皐月ちゃんもやよちゃんも陽子さんの娘であることは、智人さんが私と再婚したところで変わらないし、私が二人の面倒をみることの障害にはならない。母の愛ってさ無償の愛だからさ。

真奈美、智人を見て微笑む。

真奈美　私までくさいこと言っちゃったかな。

弥生　そうだね。きっと家族だからかな。

真奈美　ありがとう。

皐月、覚悟を決めて、ひとり語り。それは陽子に言っているようでもあり、真奈美に言っているようでもある。セリフ中に智人、ケーキの箱を持って戻ってくる。

皐月　私が中学にあがって、必死に勉強していい点数を出したらね褒めてくれてね、その日の晩御飯は私が好きなハンバーグでね、ちょっと夜更かししたらちゃんと怒ってくれてね、でも次の日の朝にはぎゅっと抱きしめてくれてね、熱を出したらずっと心配そうに看病してくれて、私が治ったら今度は風邪引いちゃって、でも大丈夫っ

て強がってね、私が好きな人が出来たって言ったらすっごい驚いて、すっごい喜んでくれて、一緒にラブレターの内容を考えてくれて、結局出す前に他の子を好きなことがわかって失恋して、元気出す必要ない、落ち込む時はとことん落ち込んでいいって言ってくれてラーメン作ってくれて。そんな真奈美さんのこと、お母さんって呼べなくて、呼べない私のことをいつも優しい笑顔で「いいんだよ」って言って、ぎゅっとしてくれて、「行ってっしゃい」「おかえりなさい」「おやすみなさい」「よくできました」って毎日毎日。ここには私の大事なものがあるの、大事な人がいっぱいなの。

陽子　皐月。

皐月　私はここでお父さんと、お姉ちゃんと、…お母さんと一緒に暮らす。

間。

智人　真奈美。

真奈美　え？

弥生　お母さん。

真奈美　うん。

智人　どうした？

真奈美　そうね。どうしたんだろう。なんだかとても心がほわって。

皐月　お母さん。

真奈美、言葉にしようとしているが出来ず、うなずくのみ。真奈美のもとに自然と集まっていく家族たち。

陽子　やれやれね。

佑花　陽子、大丈夫。

陽子　もちろん。

弥生　ケーキあったんだね。

智人　ま、あったはあった。だけどなぁ。

弥生、箱の中を覗く。

弥生　この炎天下じゃあね。

智人　俺、ひとっ走りして新しいの買ってくるわ。

弥生　その方がいいね。これじゃあ。

智人はけようとする。

皐月　（ので）待ってお父さん。
智人　え？

皐月、智人と弥生のもとへ。そして箱を受け取り、中を覗き込む。
黙り込む皐月。心配そうに見つめる弥生と智人。

弥生　皐月？
皐月　（笑ってしまい）ねえ、これみんなで食べようよ。
智人　でもクリームが溶けちゃってるし、プレートの名前もなんだか。
皐月　いい。フォークでつついてたら気にならなくなるって。食べられるんだよこれ。落としたとかじゃないんだから。
弥生　まあ、そうだけどね。
皐月　本日の主役が言っているんだから、いいって。ちょっと足りないかもだけどね。ほら沙弥姉も悟くんも。
桜　じゃあ、私がお毒味係を。
慶　貴方は大概にしなさい。

笑いが拡がっていく光景。パーティーの準備をする面々。語り合う面々。

慶　お酒お持ちしますね。
悟　あ、沙弥にはソフトドリンクを。
桜　なになに。あの大酒飲みが。
由紀子　あれじゃないですか。
悟　ええ。これなんです。

悟、お腹前で弧を描く。間。

智人　おいおい、聞いてないぞ！
真奈美　まあまあ。
陽子　私達は聞いてたけどね。
佑花　ねぇ。
弥生　おめでとう！　もう本日の主役は沙弥姉だね。

ぽつんと取り残される感じの皐月。

皐月　ちょいちょいちょい！

音楽が流れる中で暗転。

■シーン１０　《現在・皐月１９歳・誕生日前日・夏・夜・自室》

明転し、薬罐が鳴る。しばらくしてカップを手にした真奈美と皐月入り。

皐月　やよねえ、どこまで行ったんだろう。

真奈美　意外と方向音痴だからね。

皐月　グーグルマップに舌打ちした女だからね。（コップを口にして）熱っ。

真奈美　ふぅふぅしないと。暑い日には熱いお茶。これぞ日本人でしょ。

皐月　だね。

静かにふぅふぅしている皐月。そこへ玄関のドアが開閉する音。弥生入り。

弥生　暑さに殺されるぅ。あ、私にも頂戴。喉がからから。

皐月　はーい。

皐月、はけ。

真奈美　本当にドンキに行ってきたんじゃないわよね。

弥生　本気で行くつもりだったんだけど、コンビニがあったのでつい。

真奈美　それにしては長かったわね。

弥生　いや、涼しい店内から出ていくのが躊躇われてね。

皐月入り。手にはコップ。

皐月　はい、やよねえ。

弥生　すまんのー、皐月どん。

弥生、ふぅふぅ冷ましつつ一口飲む。

弥生　やはり暑い日には熱いお茶だよねぇ。

皐月、真奈美と顔を見合わせて笑う。音楽in

弥生　なに？

真奈美　私がさっき同じこと言ったから。

弥生　うわぁ、お母さんとかぶったー。

真奈美　何よそのリアクション。…あ、そうだ。家からいいもの持ってきたんだった。

真奈美、カバンをごそごそやっている。

真奈美　あった。（と言ってＵＮＯを見せる）懐かしくない？

皐月　まだあったんだ。はは。

弥生　やろやろ。

箱を開けてシャッフルをする真奈美。

皐月　じゃあ、お母さんからね。

三人がそれぞれに「お母さん」という言葉を噛み締め。負けないとか絶対勝つとかサイレントで言い合いながら溶暗。

了